

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第137集

おくちょうえふ
奥町 F 古窯群

2005

財団法人 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

序

半田市は知多半島中央部に所在し、その中核的な地域として発展してまいりました。またこの地域には、歴史的に日本六古窯の一つである知多古窯地帯が存在し、これに関連する貴重な遺跡が半島各地に点在しております。そして現在の地域産業等にもその技術と伝統が継承されているといえましょう。また近年は、常滑沖に中部国際空港が建設され、東海地域の生産流通の中核的な地域に変貌しようとしています。

さて、このたび半田市奥町 F 古窯群の発掘調査におきまして、室町時代末期の窯跡が確認され、大量の椀や甕などが出土いたしました。本書に掲載した調査成果は、学術的にも大変重要な資料となったものと考えております。さらに半田市を中心とした地域の歴史研究に大いに活用され、同時に埋蔵文化財の保護啓発につながることを希望いたしております。

最後になりましたが、奥町 F 古窯群の発掘調査につきまして、各方面の方々にご配慮を賜り、関係機関及び関係者のご指導とご協力をいただいたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 8 月

財団法人 愛知県教育サービスセンター
理事長 古池庸男

例言

- 1 本書は、愛知県半田市奥町地内に所在する奥町 F 古窯群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、知多半島横断道路拡張工事に伴う立会調査として、平成 15 年 4 月に愛知県教育委員会が実施した。これを受けて、愛知県道路公社から愛知県教育委員会を通した委託事業として財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが、整理報告作業を行った。
- 3 立会調査は、愛知県教育委員会文化財保護室の蟹江吉弘・野口哲也が担当した。
- 4 調査・報告に際しては次の各関係機関のご指導・ご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター
愛知県道路公社、半田市教育委員会、常滑市民俗資料館
- 5 立会調査にあたっては次の方々のご協力を得た。
中野晴久（常滑市民俗資料館）、近藤英正（半田市博物館）
- 6 本書の執筆・編集は赤塚次郎が担当した。
- 7 本書の作成にあたり下記の方々のご協力をいただいた。
福岡栄（写真撮影）・アイシン精機株式会社（遺物の実測・トレース）
中村たかみ・牧ゆかり（整理作業）
なお、資料の評価にあたり中野晴久氏よりご教示賜った。
- 8 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターに保管。

目次

I	経過	1
	1. 調査にいたる経緯	1
	2. 調査の経過	1
II	環境	2
	1. 奥町 F 古窯群の位置	2
	2. 奥町 F 古窯群の歴史的環境	3
III	調査	4
	1. 概要	4
	2. 陶器	8
	3. 融着資料	36
	4. その他	38
IV	総括	66
V	抄録	68

挿図目次

図 1	遺跡調査区 (1/2000)	1	図 36	I 層陶器写真 2	35
図 2	愛知県半田市位置図	2	図 37	融着資料写真	36
図 3	奥町 F 古窯群位置図および周辺遺跡分布図	3	図 38	融着分離材資料写真	37
図 4	土層断面図と写真	4	図 39	充填材と押印文	38
図 5	作業風景	6	図 40	分離材使用状況	39
図 6	調査区周辺写真	7	図 41	椀 D 実測図 1	40
図 7	遺物総数	8	図 42	椀 D 実測図 2	41
図 8	椀分類	9	図 43	椀 B 実測図 1	42
図 9	椀 A・B の形態偏差	10	図 44	椀 B 実測図 2	43
図 10	椀 C・D の形態偏差	11	図 45	椀 B 実測図 3	44
図 11	口径分布	12	図 46	椀 A 実測図 1	45
図 12	底径分布	12	図 47	椀 A 実測図 2	46
図 13	器高分布	12	図 48	椀 A・C 実測図	47
図 14	II 層椀 C・D 実測図	13	図 49	椀 C・小椀実測図	48
図 15	II 層椀 B 実測図 1	14	図 50	小椀実測図	49
図 16	II 層椀 B 実測図 2	15	図 51	椀写真	50
図 17	II 層椀 A・B 実測図	16	図 52	融着資料写真	51
図 18	II 層椀 A 実測図	17	図 53	融着資料実測図 1	52
図 19	II 層小椀実測図	18	図 54	融着資料実測図 2	53
図 20	II 層小椀写真	19	図 55	融着資料実測図 3	54
図 21	II 層椀写真 1	20	図 56	融着資料実測図 4	55
図 22	II 層椀写真 2	21	図 57	融着資料実測図 5	56
図 23	II 層椀実測図	22	図 58	融着資料実測図 6	57
図 24	II 層椀・小椀実測図	23	図 59	融着資料実測図 7	58
図 25	II 層上椀・小椀実測図	24	図 60	融着資料実測図 8	59
図 26	II 層上椀写真	25	図 61	陶器実測図 1	60
図 27	II 層融着資料写真 1	26	図 62	陶器実測図 2	61
図 28	II 層融着資料写真 2	27	図 63	陶器実測図 3	62
図 29	II 層上陶器実測図	28	図 64	陶器実測図 4	63
図 30	I 層陶器実測図 1	29	図 65	陶器写真 1	64
図 31	I 層陶器実測図 2	30	図 66	陶器写真 2	65
図 32	I 層陶器実測図 2	31	図 67	奥町 F 古窯群周辺鳥瞰	66
図 33	I 層陶器実測図 3	32	図 68	奥町 F 古窯群	67
図 34	I 層上陶器実測図	33	図 69	椀と小椀の変化の方向性	67
図 35	I 層陶器写真	34			

I 経過

1 調査にいたる経緯

平成 15 年 4 月、愛知県知多横断道路（半田市奥町地内）にて、工事中に新規の埋蔵文化財を発見。

埋蔵文化財が発見された場所は、知多横断道路工事に必要な場所であり、一定の高さまで掘削する必要があることが、事業者側から提示された。そこで県道路公社との協議の上で、県文化財保護室職員が工事立会を実施することが決定された。

工事立会は県道路公社より作業員・重機の提供を受け、半田市教育委員会の協力を得て県文化財保護室蟹江吉弘・野口哲也が実施した。立会調査日は平成 15 年 4 月 3 日から 10 日までである。

2 調査の経過

立会調査は、残存する灰層部を中心に作業員による掘削を行い、遺物の採集などを実施した。掘削断面には明瞭な灰層が認められ、この部分の精査を行うと伴に、各層位の確認や窯体の推定などに重点を置きながら断面観察および実測調査を実施した。また重機による周辺の試掘調査を併行して実施し、おおよその灰層範囲の確認を行った。灰層断面の調査からは複数の窯体の存在が推測でき、付近に古窯群が存在したことが判明し「奥町 F 古窯群」と命名することになった。

採集遺物は遺物用コンテナ 282 箱である。

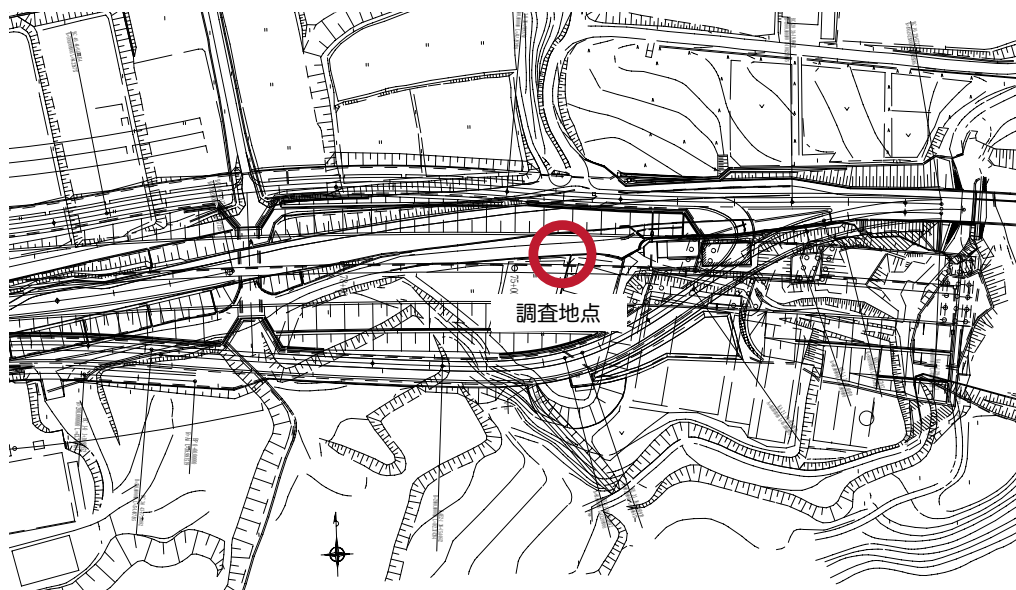


図 1 調査区位置図 (1/2000)

II 環境

1 奥町 F 古窯群の位置

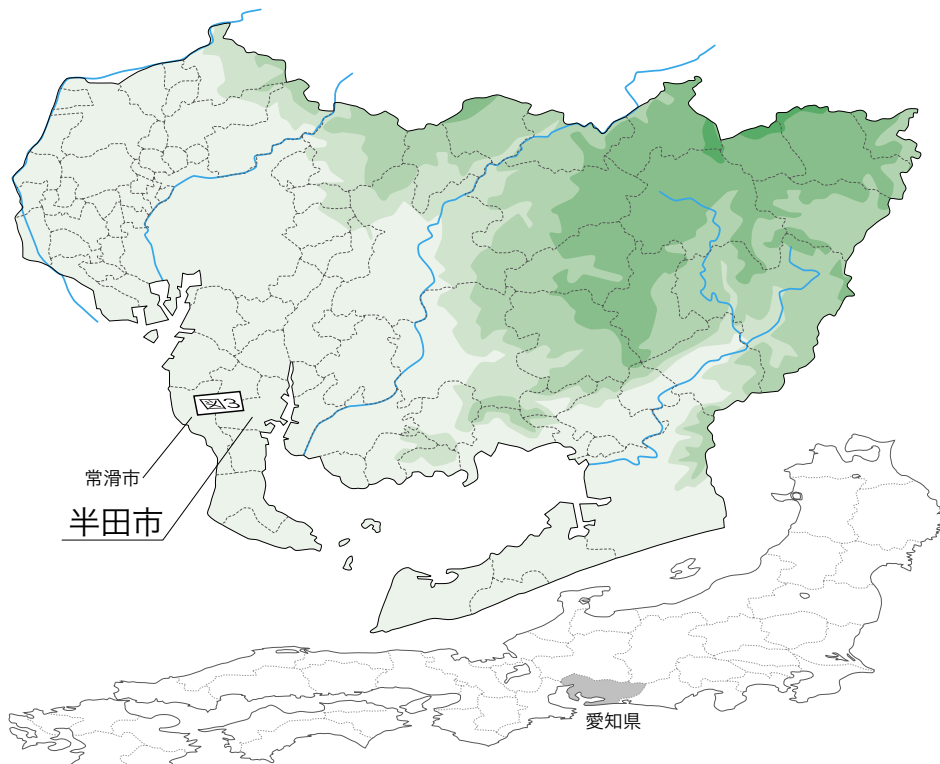


図2 愛知県半田市位置図

半田市が所在する知多半島は、愛知県南西部において伊勢湾に突きだした半島地形を成している。その中央部に半田市が所在する。知多半島は中央部に南北に低い丘陵部が存在し、これを分水として伊勢湾側と三河湾側にわかれており、半田市域は知多半島と渥美半島に囲まれた三河湾に面している。知多半島を背骨のように貫く低丘陵からは、東西に向かって幾筋かの小さな尾根が派生し、知多半島独特の景観を形作っている。これらの派生する小規模な尾根には多くの古窯が分布し、日本六古窯の一つに数えられる知多古窯跡群を形成している。

奥町 F 古窯群が所在する場所は、知多半島中央部東海岸の三河湾側に位置し、現在は半田市域に含まれる。半田市は現在人口 11 万 4 千人の都市で、港湾に恵まれ古来より海運業が盛んで、醸造業や織物、製塩などの産業により発展してきた。現在は鉄工・金属工業などを中心として知多半島の中核都市として発展している。

半田市の北西端、奥町地区に存在する奥町古窯群は、半島中央部に連なる低丘陵から、東南に派生した尾根の西斜面に立地している。付近の標高は 60 ～ 70m を測る。古窯群は半島を東西に走る知多半島横断道路から北側の低い丘陵状の斜面に広く展開し、現在の所 A から F の 6 ヶ所に古窯が存在していることがわかっている。奥町 F 古窯群は奥町古窯群の最南端に位置し、知多横断道路敷地内を中心に分布する。遺跡の西側には半田市池田地区からつながる低地帯が広がっている。

2 奥町 F 古窯群の歴史的環境

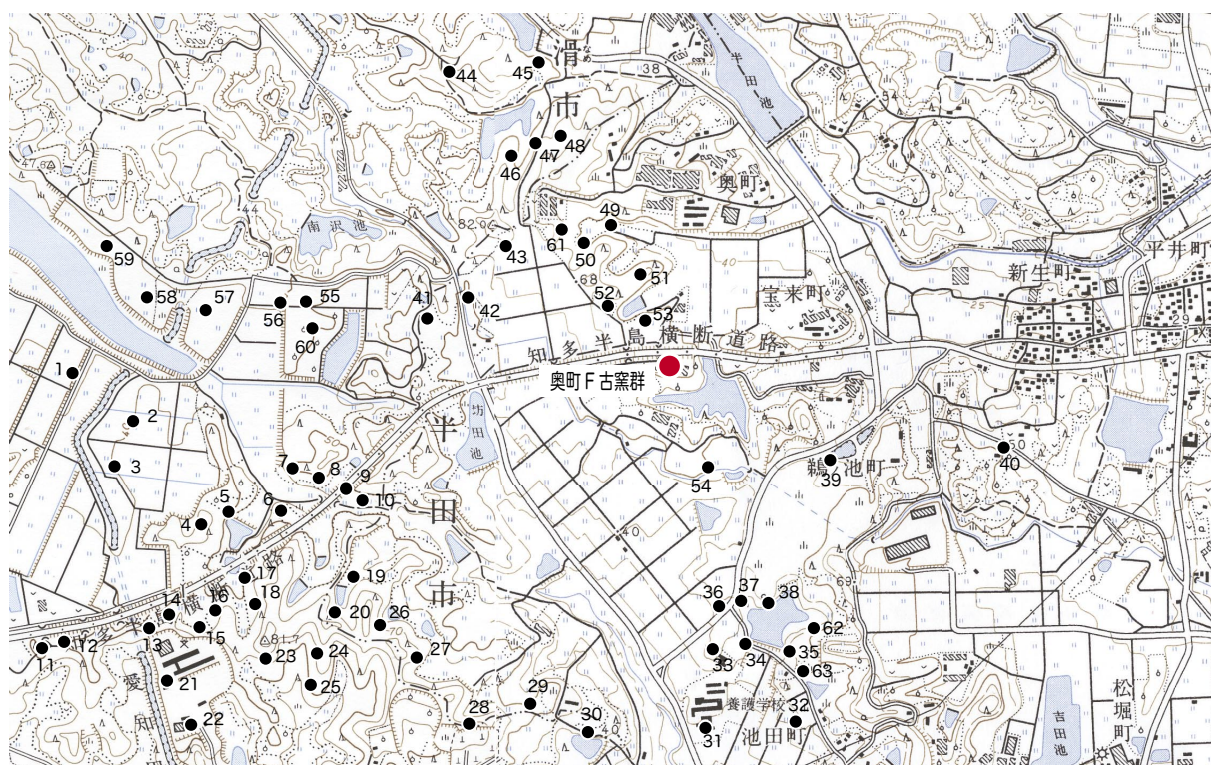


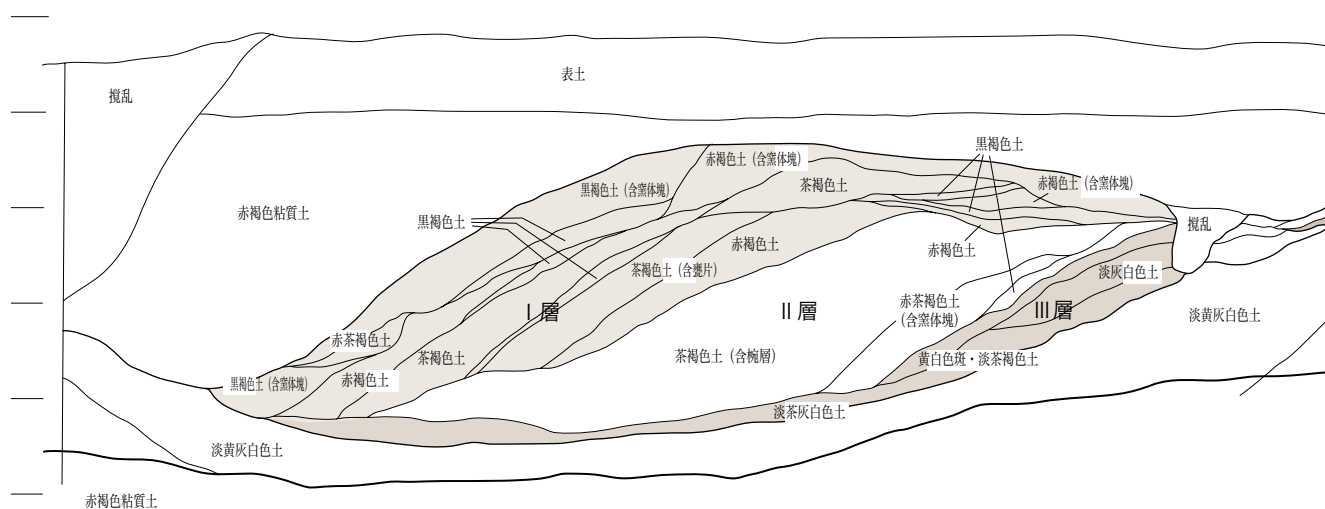
図3 奥町 F 古窯群位置図および周辺遺跡分布図 (国土地理院 1/25000 常滑・半田より)

奥町古窯群は、半田市と常滑市の境に存在する柴山丘陵の東側に位置する。常滑市柴山丘陵一帯には金色古窯群・柴山古窯群をはじめとする常滑市域最大規模の古窯群が展開し、密集した生産地域を形成している。この地区は平安時代末期から、甕・広口壺・短頸壺・三筋壺などの大型製品・特殊品を生産している地域でもあり、また甕を中心とした大型品の生産が当地域の特色にもなっている。半田市域の古窯群も柴山丘陵の古窯群と連動する関係にあり、その影響下において操業を行っていたものと推測できよう。奥町古窯群の南に分布する池田古窯群や大池古窯群では発掘調査が実施されており*、甕・碗を出土し、12世紀後半期を中心とした遺物が報告されている。

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 1 松洲 C 古窯 | 22 ニノ田 A 古窯群 | 43 三ツ池 C 古窯群 |
| 2 松洲 A 古窯群 | 23 柴山 C 古窯群 | 44 濁池 B 古窯群 |
| 3 松洲 B 古窯群 | 24 柴山 B 古窯群 | 45 濁池東古窯群 |
| 4 金色 C 古窯群 | 25 柴山 A 古窯群 | 46 高峰池 A 古窯群 |
| 5 金色 B 古窯群 | 26 行人 C 古窯群 | 47 高峰池 B 古窯群 |
| 6 金色 A 古窯 | 27 行人 D 古窯群 | 48 門ヶ脇 A 古窯群 |
| 7 金色東 D 古窯 | 27 十三塚 A 古窯 | 49 奥町 B 古窯群 |
| 8 金色東 C 古窯群 | 29 十三塚 B 古窯 | 50 奥町 A 古窯 |
| 9 金色東 A 古窯群 | 30 花廻間池古窯 | 51 奥町 C 古窯 |
| 10 金色東 B 古窯 | 31 池田 F 古窯 | 52 三ツ池 D 古窯群 |
| 11 四池 B 古窯 | 32 池田 G 古窯 | 53 奥町 D 古窯群 |
| 12 四池 A 古窯 | 33 池田 D 古窯 | 54 鶴ノ池 A 古窯 |
| 13 ニノ田 C 古窯群 | 34 池田 C 古窯群 | 55 坊田池 A 古窯 |
| 14 金色南 D 古窯群 | 35 池田 E 古窯群 | 56 坊田池 B 古窯 |
| 15 金色南 C 古窯 | 36 池田 A 古窯 | 57 南山 A 古窯 |
| 16 金色南 B 古窯群 | 37 池田 I 古窯 | 58 南山 B 古窯 |
| 17 金色 D 古窯群 | 38 池田 B 古窯 | 59 南山 C 古窯 |
| 18 金色南 A 古窯群 | 39 大池古窯群 | 60 坊田池 C 古窯 |
| 19 行人 A 古窯群 | 40 新生 A 古窯 | 61 奥町 E 古窯群 |
| 20 行人 B 古窯 | 41 三ツ池 A 古窯群 | 62 池田 J 古窯 |
| 21 ニノ田 B 古窯群 | 42 三ツ池 B 古窯群 | 63 池田 K 古窯群 |

Ⅲ 調査

1 概要





作業風景

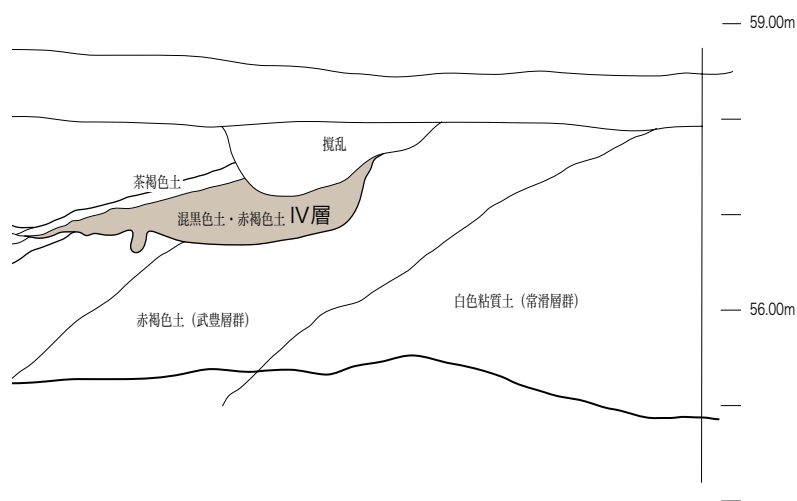


図4 土層断面図 (1/80) と写真

調査地点の本来の地形を復原すると、まず赤褐色粘質土層である武豊層群が図面右上から左に向かって傾斜することから、東側に溪筋を置く緩斜面が本来の地形であったと思われる。この低丘陵状の西斜面に、灰層が幾重にも折り重なるように堆積していることが調査で確認できた。2次的な堆積層としては大きく3つに区分できる。まず第Ⅲ層としたものは低丘陵の自然堆積層の上に約40cmほどの層堆積が見られるもので、遺物が包含されておらず、近接して設けられた窯体築造時における人工的な改変（前庭部）に起因するものと推測される。その上部には第Ⅱ層として150cmほどの層堆積が存在する。第Ⅱ層からは大量の碗・皿類が出土している（山茶碗大量層として取上）。Ⅱ層下位には窯壁が混在した層が存在する。第Ⅰ層は160cmほどの複数の層堆積層で構成され、黒色土層と赤褐色土層の互層を成す。Ⅰ層上位には窯壁などが混在した層が比較的厚く堆積する（甕出土赤褐色層として取上）。

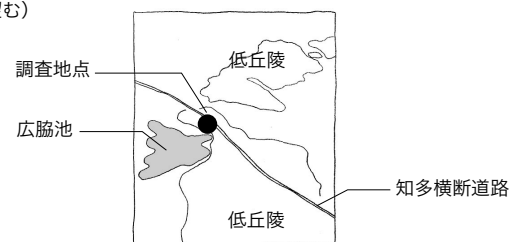
以上のように大きく概観しても2基以上の窯体が近接して存在していたことが推測できる。さらに壁面右側にも別の黒色堆積層(Ⅳ層)が存在し、奥町F古窯群の構成は、操業古窯数としては3基を降ることはないものと思われる。



図 5 作業風景



図6 調査区周辺写真（南東から望む）



III 調査

2 陶器

■器種構成

調査によって出土した遺物は、コンテナ 282 箱であるが、その内訳は以下のようになる。総破片数は 11475 点を数え、すべてが陶器類である。全体の形状を確認できる資料は 1566 点で、碗が 1201 点・小碗が 364 点・その他（鉢）1 点であり、甕壺類は復原できていない。2 点以上の融着資料は 850 点を数え、碗が 760 点と多くを占め、小碗が 90 点である。器種を概観すると全体として碗が 74% を占め、次に甕壺類が 20.9% を占め、小碗は 4.9% であった。陶器類がまとまって検出できた第 I 層は、甕壺類が 83.5% を占め、碗は 14.1% であり、第 II 層は碗が 88.9% を占め甕壺類は 5.1% となる。第 I 層が甕壺類を主体とする堆積層であるのに比べて、その下位にあたる第 II 層は碗を中心とした堆積層である。碗と小碗の比率であるが、全体では碗が 100 に対して小碗は 6 となり、第 II 層では碗が 100 に対して小碗はやはり 6 となった。なお三筋壺は破片資料であるが、全体でも 13 点であり、短頸壺は 14 点であった（多くは第 I 層出土）。また羽釜は 8 点、鉢は 13 点を数え、その他の器種は確認できていない。

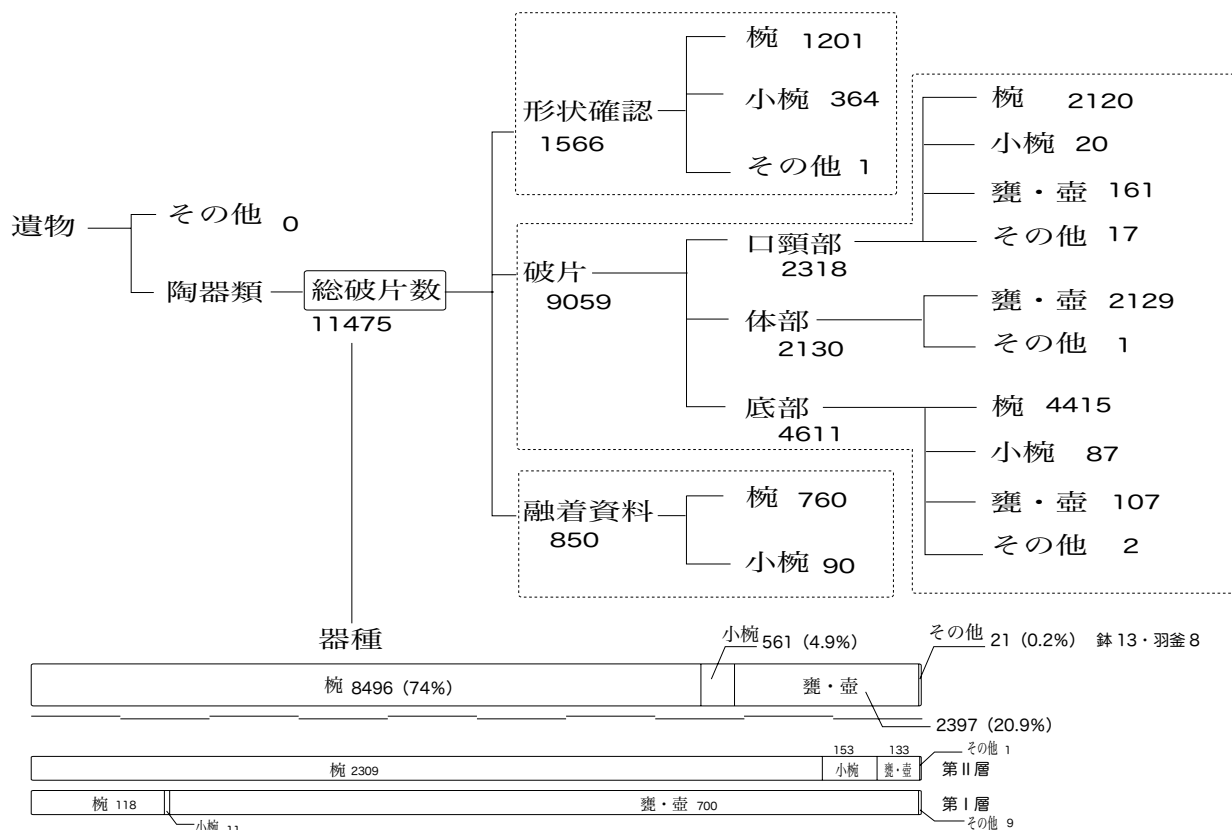


図 7 遺物総数

■器種分類

出土した陶器類は、碗・小碗・甕・壺・三筋壺・短頸壺・羽釜・鉢である。その内で無釉の碗・小碗類が第Ⅱ層を中心に大量に出土している。ただし、調査の関係からその出土層を把握できた資料はある程度限定される。そこで、第Ⅱ層出土品（山茶碗大量層として取上資料）を中心として碗・小碗の分類とその特徴を整理することにした。その結果をその他の資料群に援用することとした。なおⅡ層出土碗類は赤羽・中野 1b 型式新相資料。

碗は大きく4つに区分でき、碗A・B・C・Dとし、小碗は同じくA・B・Cの3つに区分しておきたい。碗Aは、最も多く見られる資料であり、中核的な型式と思われる。底部から口縁にかけて緩やかに碗曲し、端部付近で若干の外反が認められるものである。総じて手に取った段階で、重さを感じる資料で、断面は均一な厚みのある形を基本とする。さらに底部にいたるとおおむね水平的な整形が施される。碗Bは底部から口縁部へ緩やかな碗曲が見られ、端部では強い外反が存在する。碗Aと異なり、断面は不均一で内部の形状は全体的に緩やかな碗曲線を保つ、したがって底部断面は不均一になるか、相対的に底部中央に向かって下降する。どちらかというやや薄手で軽量感がある資料が目立つ。碗Cは全体の形状が碗曲を志向するものであり、内面の形状もその状況を持することが多い。やや厚手で重量感がある資料が多いようである。碗Dは底部から口縁にかけて直線的な印象をもつもので、断面の厚さは不均一なものが主体を占める。外形とは関係なく内部の形状は緩やかな碗曲ないし傾斜面を保持するものが多い。したがって底部付近や口縁端部付近は極点に薄い状況が生み出される。手に取った段階ではどちらかという薄手、軽量感がある資料が主体を占める。

小碗は3つに大きく区分でき、小碗Aは底部から口縁部にかけて緩やかな碗曲を描くもので、内面の形状も曲線的になる。底部中央部に調整・整形の痕跡である高まりが残存するものが目立つ。全体的に重量感がある資料である。小碗Bは体部が直線志向を有するもので、小碗Cは強いナデ調整による体部二段構成が見られる資料である。断面は箱状になるものが多く見られる。

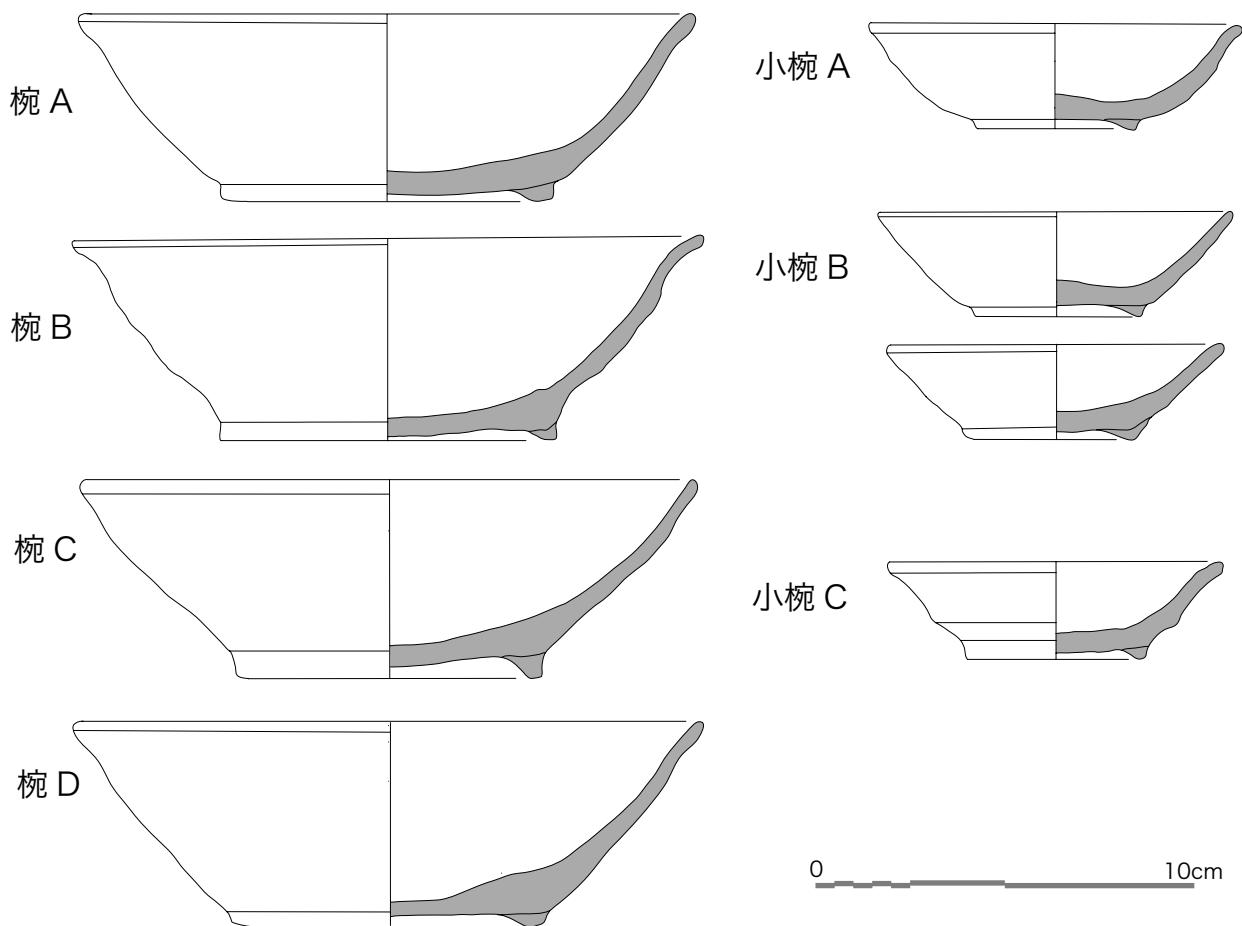


図8 碗分類

■ 碗の特徴

碗の形状を実測図を基本にして整理したのが下図である。単純に外形線を重ねたものであるが、幾つの特徴を読み取ることができる。なお図の最下段は代表的な外形を表示したものであり、その上部3点は器高の違いを区分して表示した。中央が最も代表的な器高をもつ一群の資料であり、その上図はこれに較べて若干ではあるが器高が低くなるもの。下図は器高が高くなる資料を重ねたものである。

まず碗Aであるが、ほぼ中央画像に重複するものが多数を占め、形態的な特徴を共有する傾向が強いことがわかる。その一方で形を踏襲しながら全体の器高だけを低下させた資料も散見できる。断面は均一なものが多く、底部にいたるもその厚さを保持し、底部内面は平坦面を志向する。器高は高さを増加する方向には無く、どちらかというとな低下させた資料に方向性が存在するようである。それは当資料が赤羽・中野編年の1b型式内に留まる資料であり、後続する2・3型式の資料がおおむね、碗Aを母体にし、器高の低下を志向する点からも想定できよう。

碗Bであるが、碗Aと共に最も量的に多くを占める一群の資料である。碗Aと同様に中央画像である平均的な資料と器高を低下させた資料に重複関係が多く見られる。碗Aに較べて底部から口縁にいたる体部の形にバラつきが存在し、形態の成形に碗Aほどのまとまりは見られないと考えられる。なお、器高の増加はほとんど存在しないと見て良く、やはり器高を低下する方向性が推測できよう。

碗Cは絶対的な数量が不足する資料であり、確定的な内容は推測できない。体部の形状も不安定で、本資料内としては恣意的な形態と推測できる。ただ器高に高さの増加志向が読み取れる可能性を残す。別な素材の写し、あるいは形態的に玉縁碗系の残存形態の可能性も考えられよう。

碗Dは器高・口径・底径などに最もバラつきが大きく、統一された形態への志向性は読み取ることが難しい。

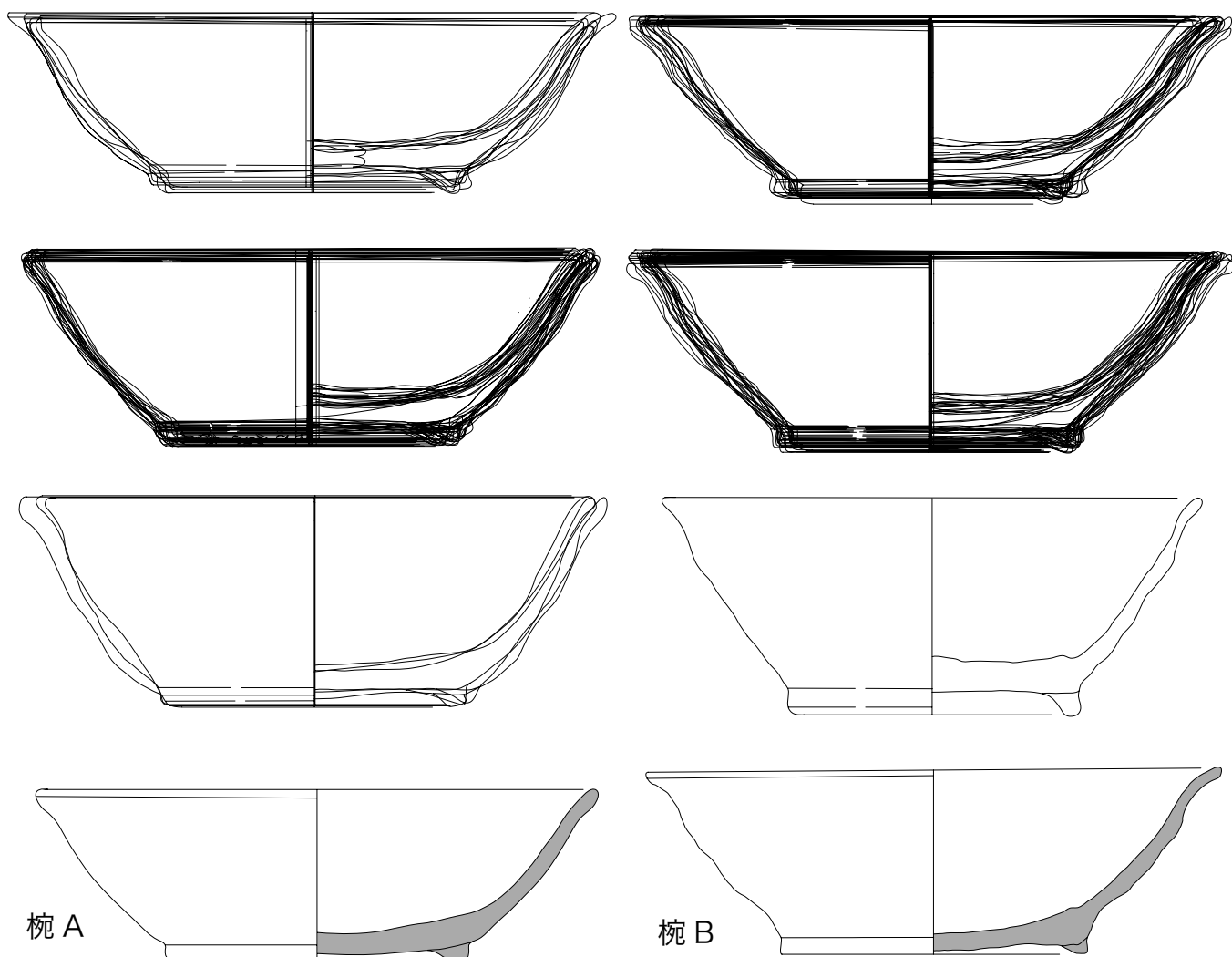


図9 碗A・Bの形態偏差

体部の形状にもやはり変動差が大きい。ただ、中央画像である平均的な資料には一つの成形法が看守できるようであり、この点を評価する必要があるかもしれない。特に断面形状において外形と内形の明瞭な違いは、断面の不均一を生み出し、手に取った場合、どちらかというとき軽量感をもたらす。口径と底径に一つの基準を持ち、体部の直線化と内形の碗曲化を志向した器種といえよう。加えて器高の基準が不安定で、曖昧である点も重要と考えたい。

■小碗の変化の方向性

小碗 A は総じて口径が大きく成形・整形に力強さが残る資料が多い。量的に見ても少数であり、赤羽・中野編年の 1 型式からの変化を見据えた場合、明らかに前型式からの残存形態であることがわかる。小碗 A から小碗 B が生み出された点は、体部の形状や断面形態等から容易に類推できよう。小碗 B による体部の直線化志向が本資料群の主体を占める。そして口縁部調整そのものを表面化させた小碗 C の出現が特徴的と思われる。小碗 C の最大の特徴の一つに断面形態が箱状になる点であり、これがその後の小碗から皿への変化を決定づけることになる。そして調整痕跡として出発した口縁付近のナデ調整が、そのまま整形技法に転化することにより、単純化した皿形態が生み出される。なお、4 点ではあるが貼付高台が欠損する資料が混在する（下写真 129・225）。

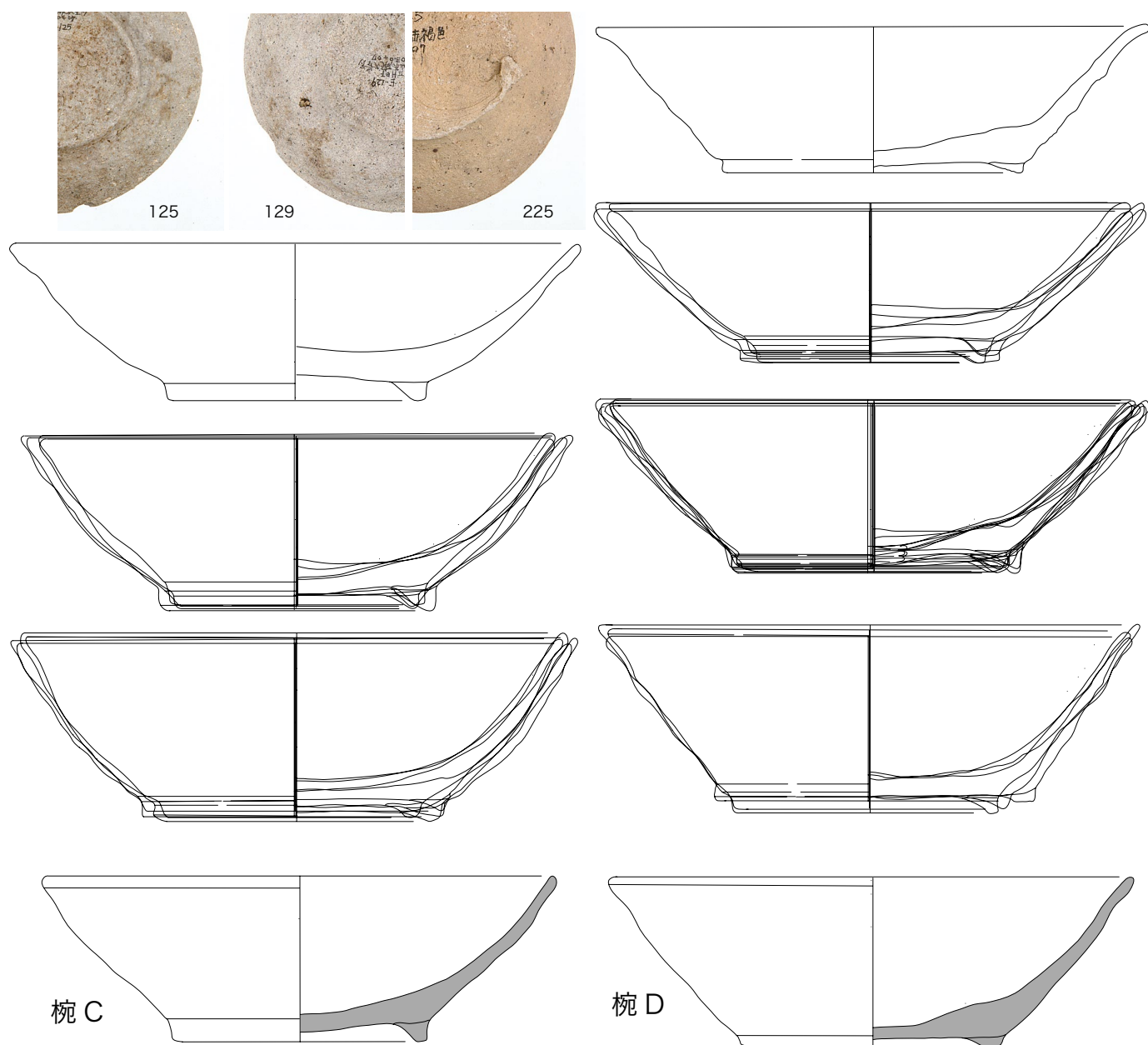


図 10 碗 C・D の形態偏差

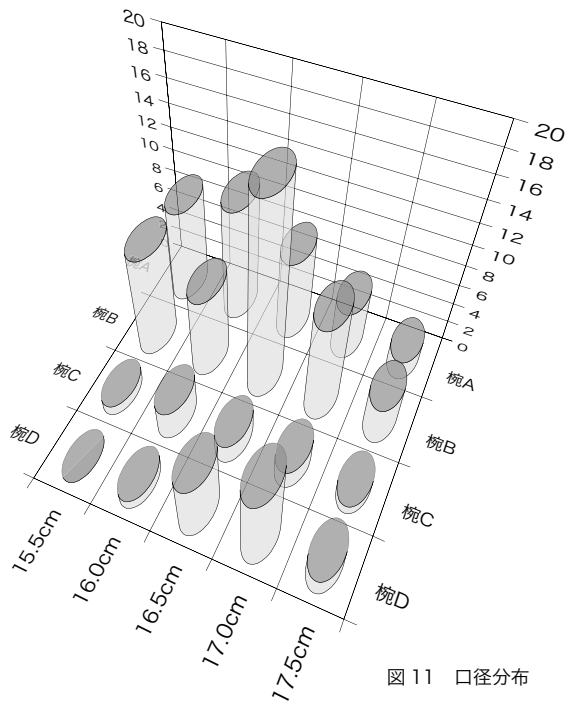


図 11 口径分布

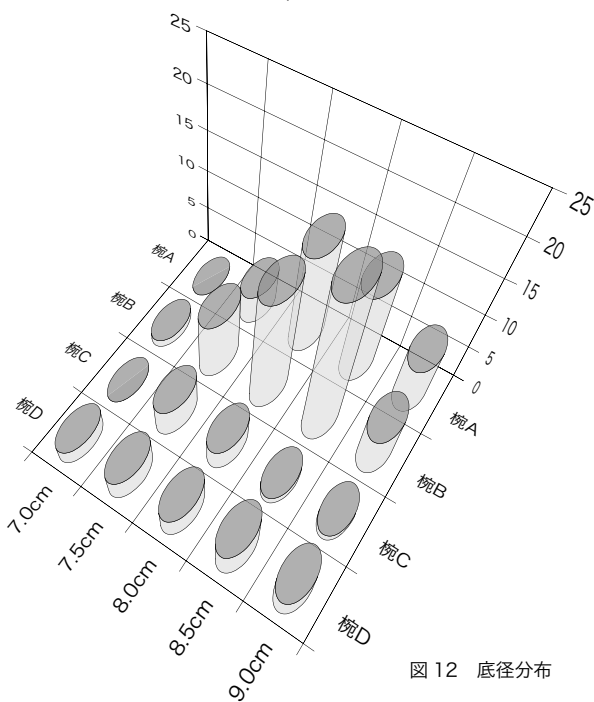


図 12 底径分布

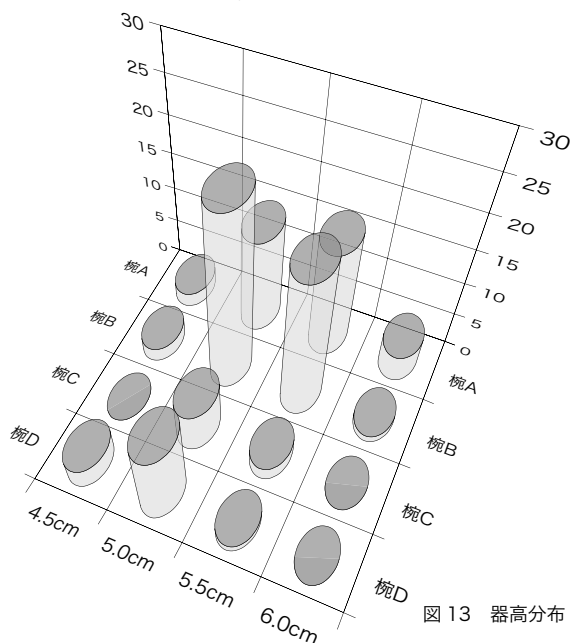


図 13 器高分布

■ 碗の法量幅について

碗についてその口径を見て行くと、おおむね 15.5cm から 17.5cm の 2cm 幅の間に集中する。各型式との関係を概観すると、碗 A と碗 B はどちらかという口径が狭い方に偏在する傾向が読み取れる。逆に碗 D は口径が大きい方向に偏るようである。前者は 16cm 前後に、後者は 17cm 前後に中心を置く。

次に底径を見て行くと、やはり碗 A と碗 B が総じて底径がより大きい方に偏在し、碗 C がやや底径が小さい方にかたまる傾向が読み取れる。碗 D には偏在性が見られない。

器高についても、やはり大きく二つに区分できるような分布が見られる。つまり碗 A と碗 B の器高が 5.0cm から 5.5cm に偏在するものと、5cm 前後に中心を置くものとが見られる。

以上の諸点を総合すると、本資料群内では、碗 A・碗 B とした比較的口径が小さく、底径が大きい、また器高が高い碗類と、それ以外の碗 C・碗 D が存在する。その中で碗 D は口径をより大きく、器高を低くする傾向が読み取れる。前者はイメージ的に箱状の形態を後者は皿状の形態を志向する。

■ 小結

数値の幅と全体の形状を見てきたが、ここでこれらの属性から浮かび上がる問題点を整理しておきたい。

主体となる碗 A・碗 B はほぼ同様な変化の方向性を内包することがわかった。これはこの時代性を表す代表的な器形である点を示している。口径が 16cm 前後で底径が 8.0cm から 8.5cm 前後、器高が 5.0cm から 5.5cm の幅に収まり、体部が碗曲して端部に外反志向が表面化する形態。そして器高に低下志向が内包され、厚みの不均一化が読み取れる。

こうした中核的な「形」の周辺にやや恣意的な碗 C が存在し、さらに興味深いのが碗 D の存在である。碗 D は碗 A・碗 B で内包していた器高の低下志向をすでに表面化させた形として登場しており、碗底面の平坦化と厚さの不均一が標準化され、やがて内部の碗曲化が消失していく素地を作っていると理解したい。それはまるでその後の「山茶碗」の形態を決定したかのようでもある。なお 1b 型式標識資料とする上白田 1 号窯では、口径 16.2cm、底径 8.2cm、器高 5.25cm との報告があり、本資料群と同様な値が提示されている。

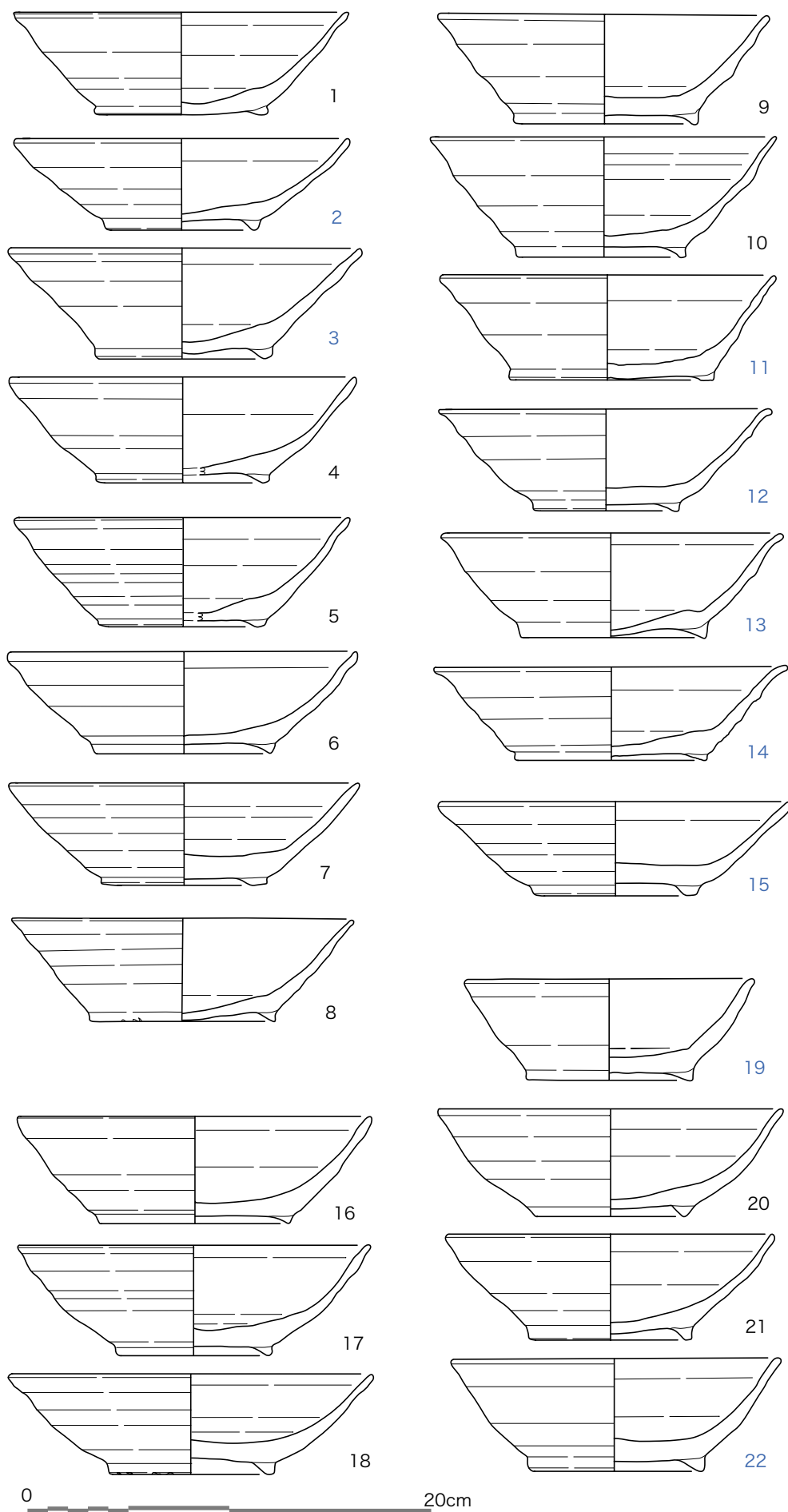
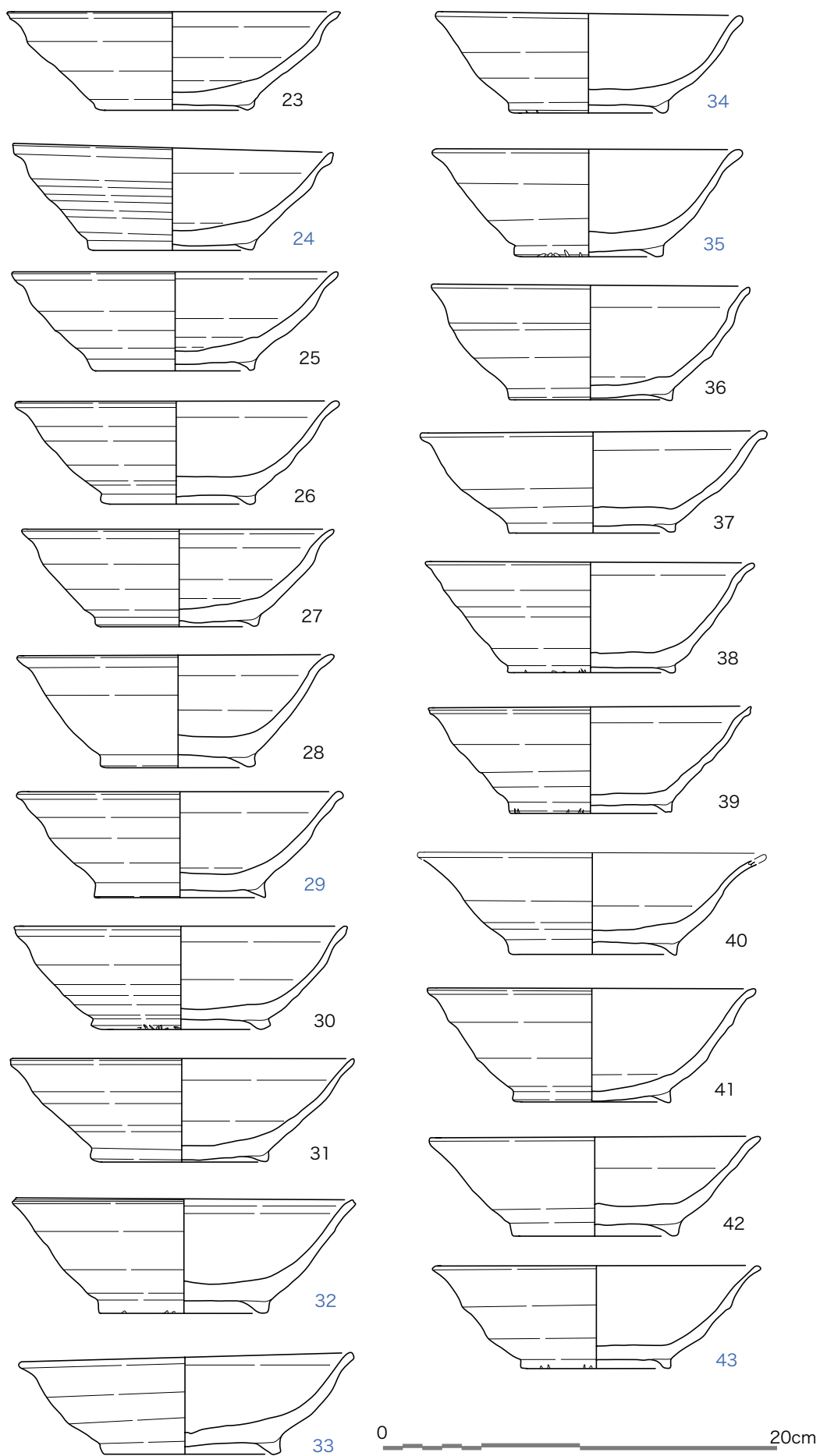
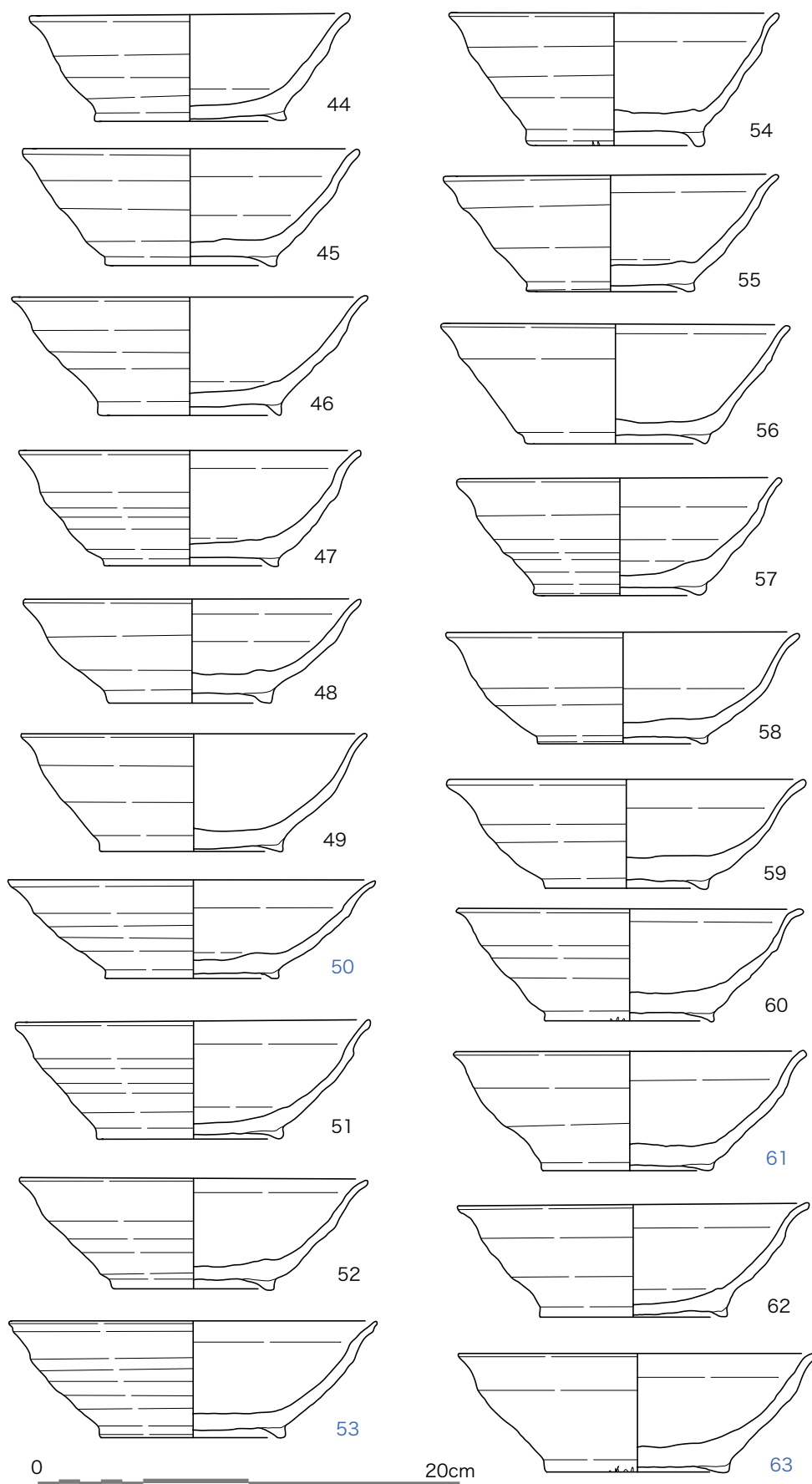
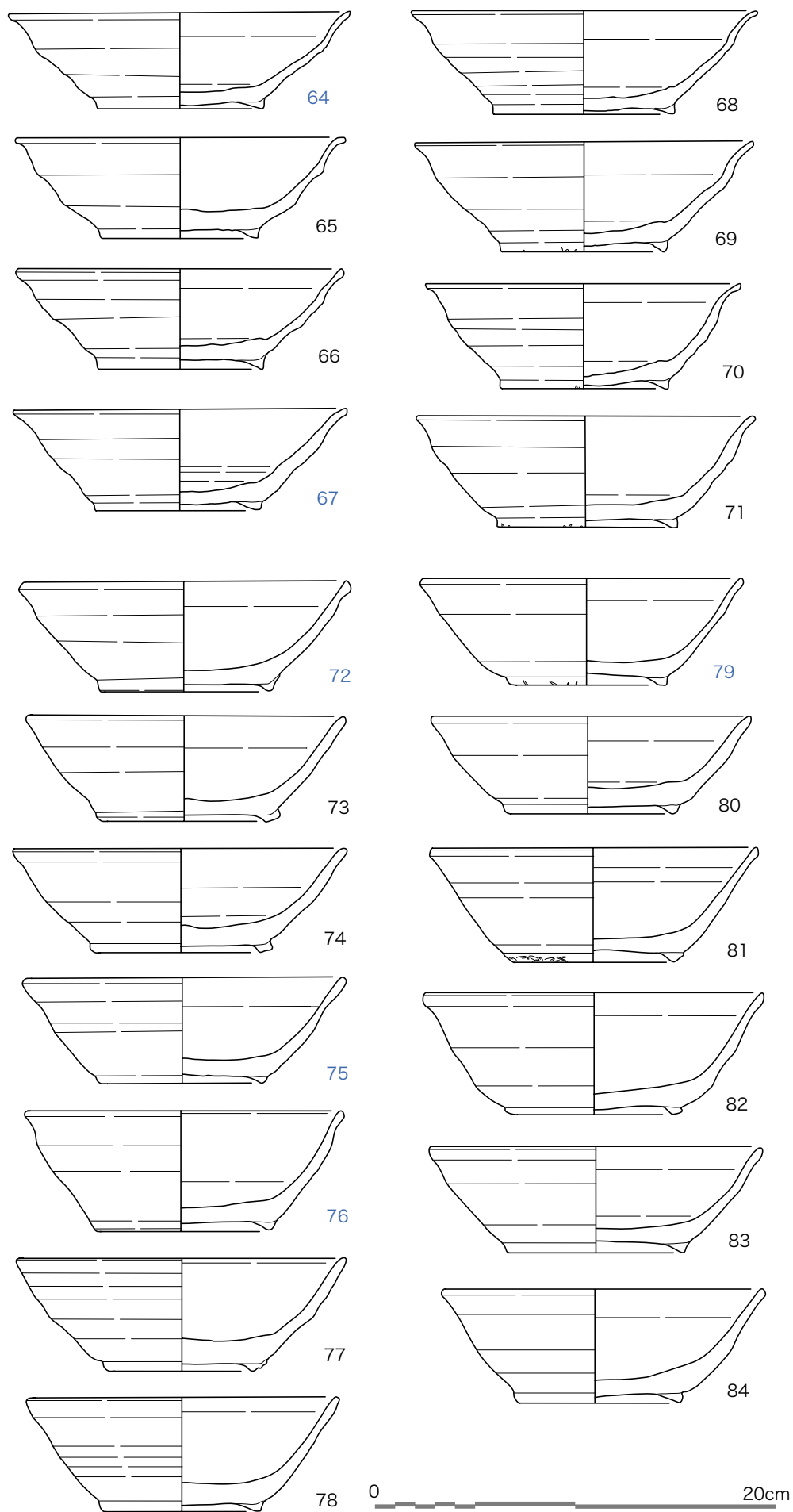
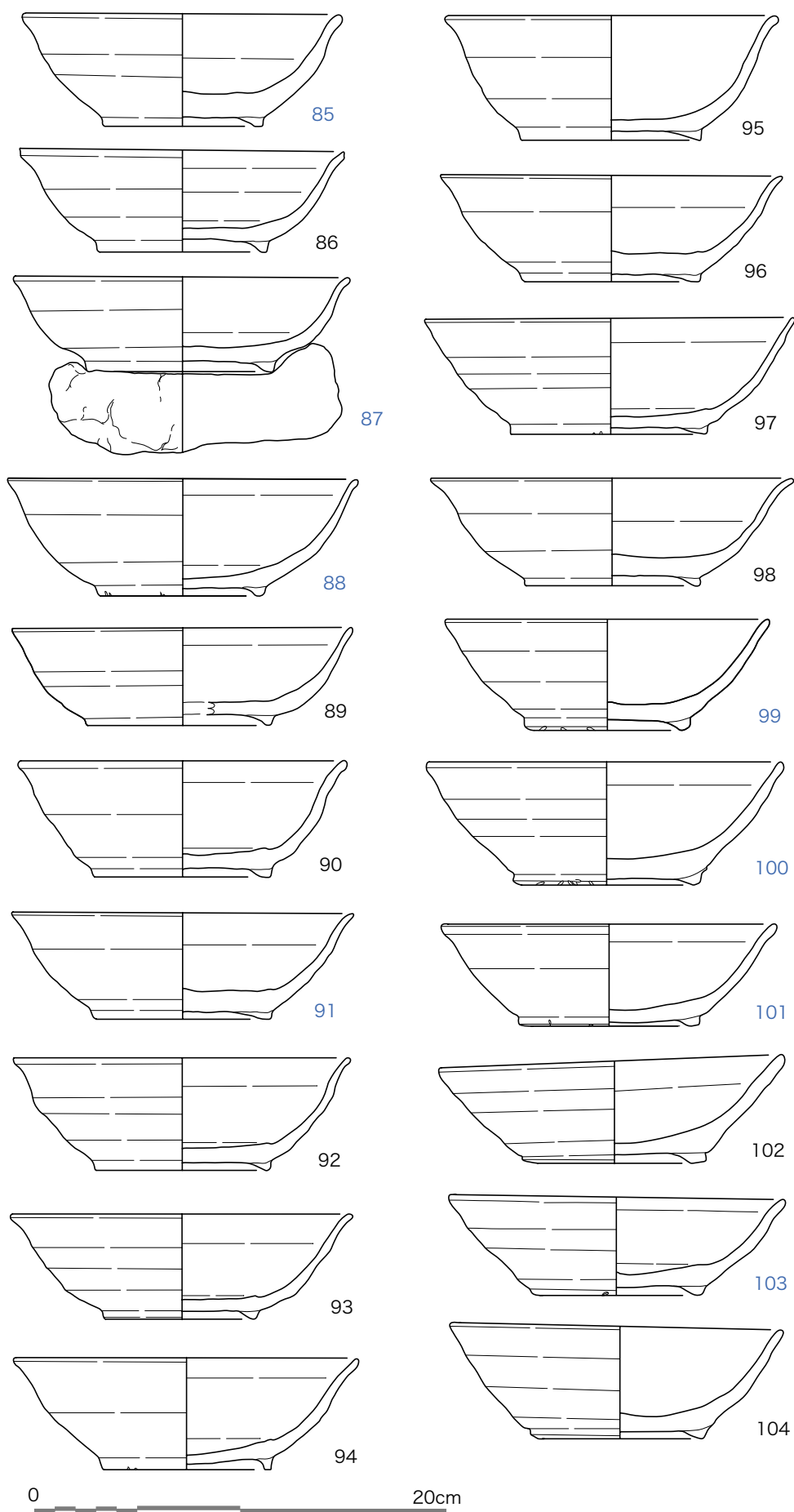


图 14
II 层
碗 C · D 实测图









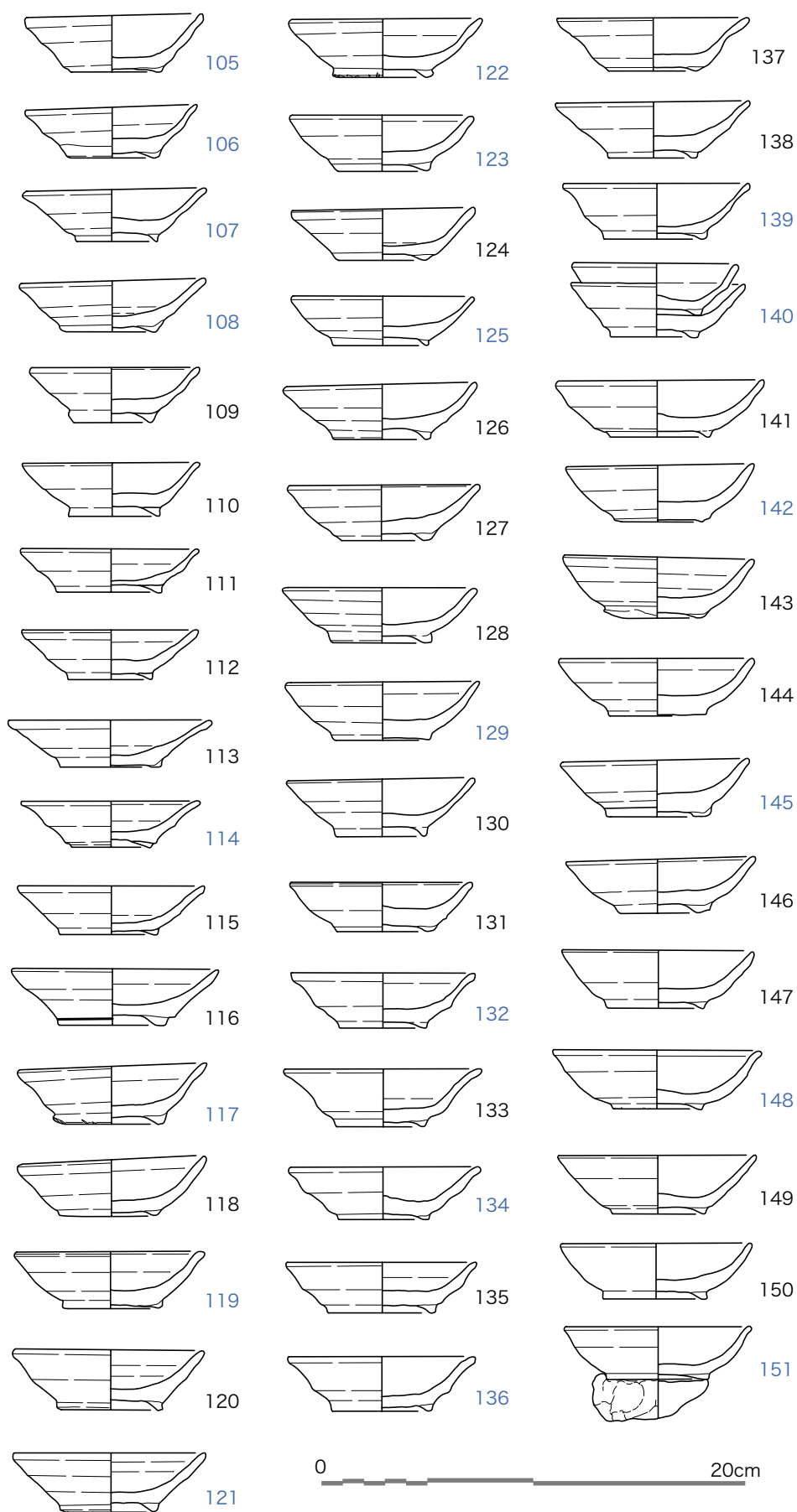




图 20
II 层 小碗写真

图21
II 層
碗写真1





61



75



88



63



76



91



64



79



99



67



85



100



72



87



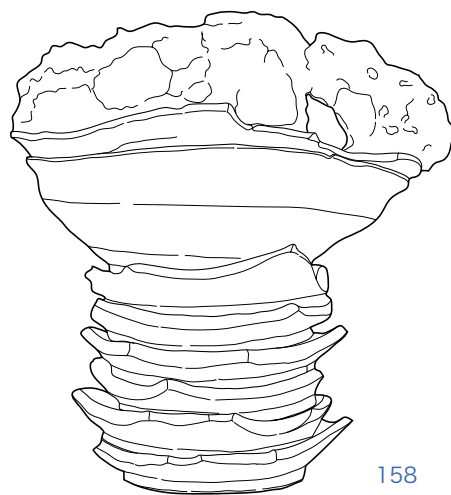
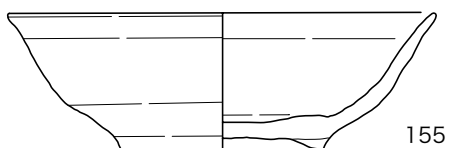
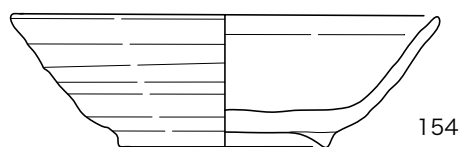
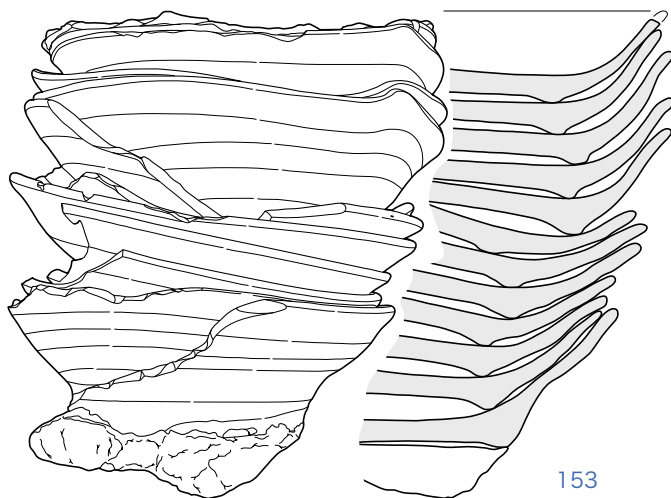
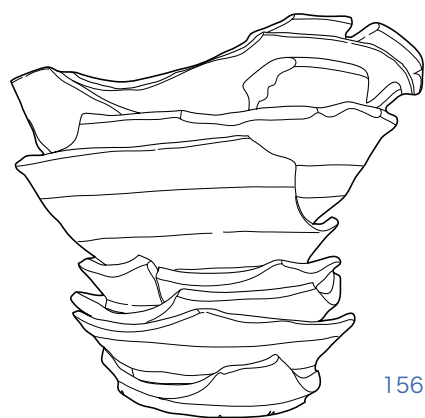
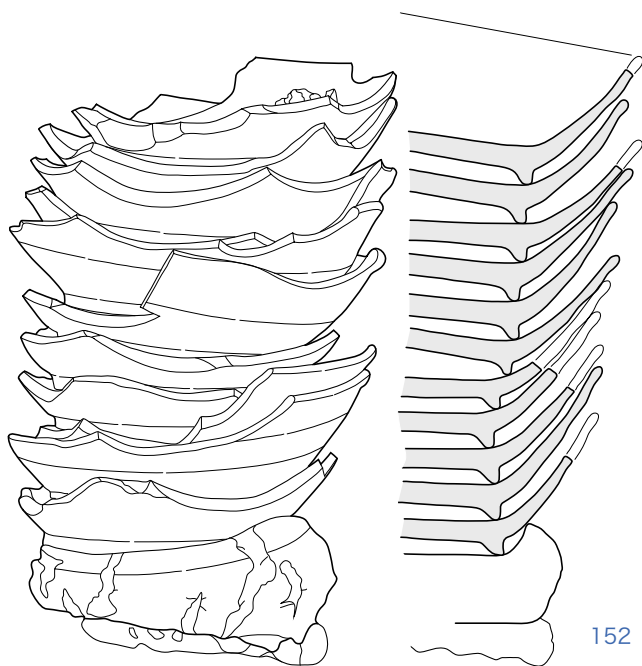
101



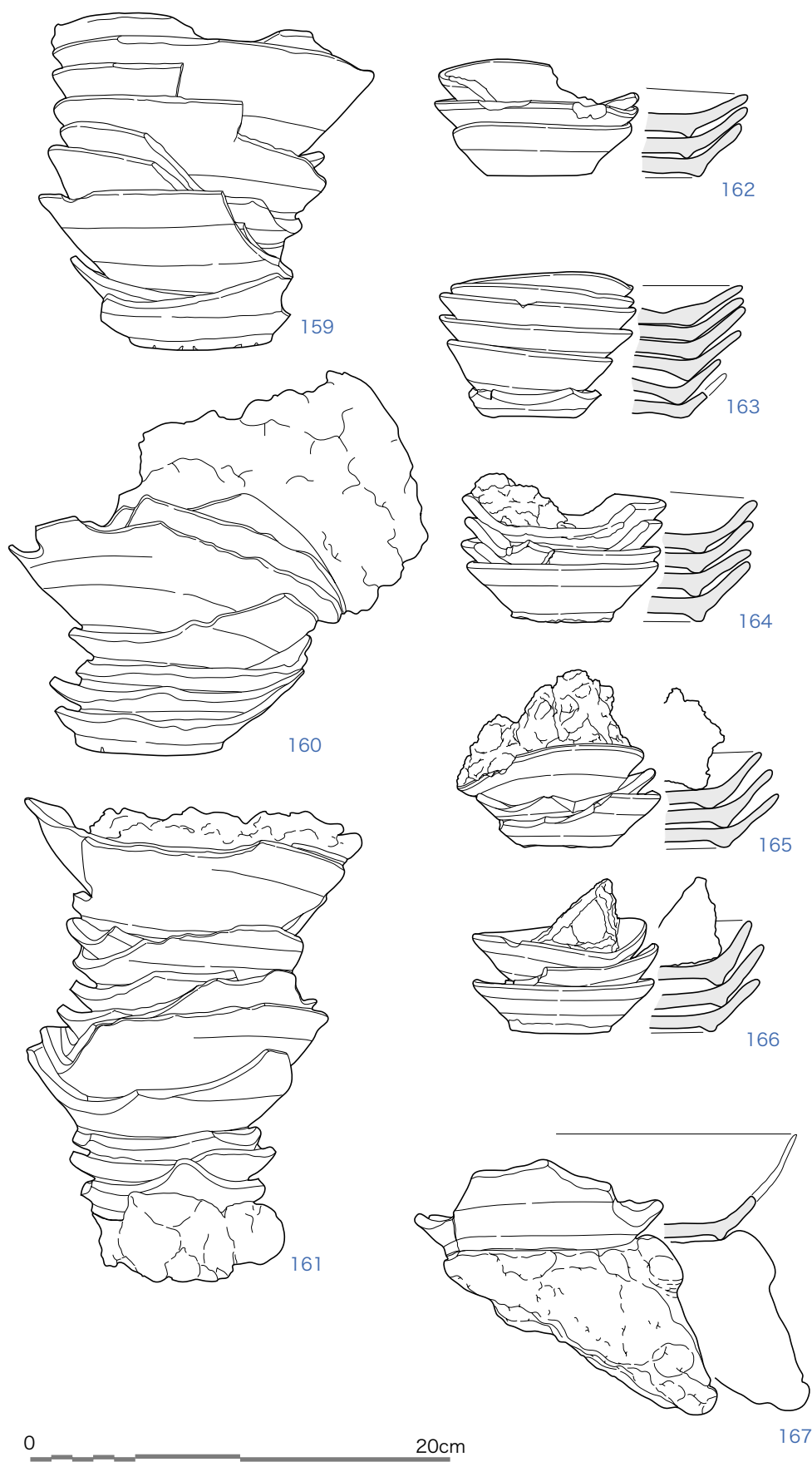
53

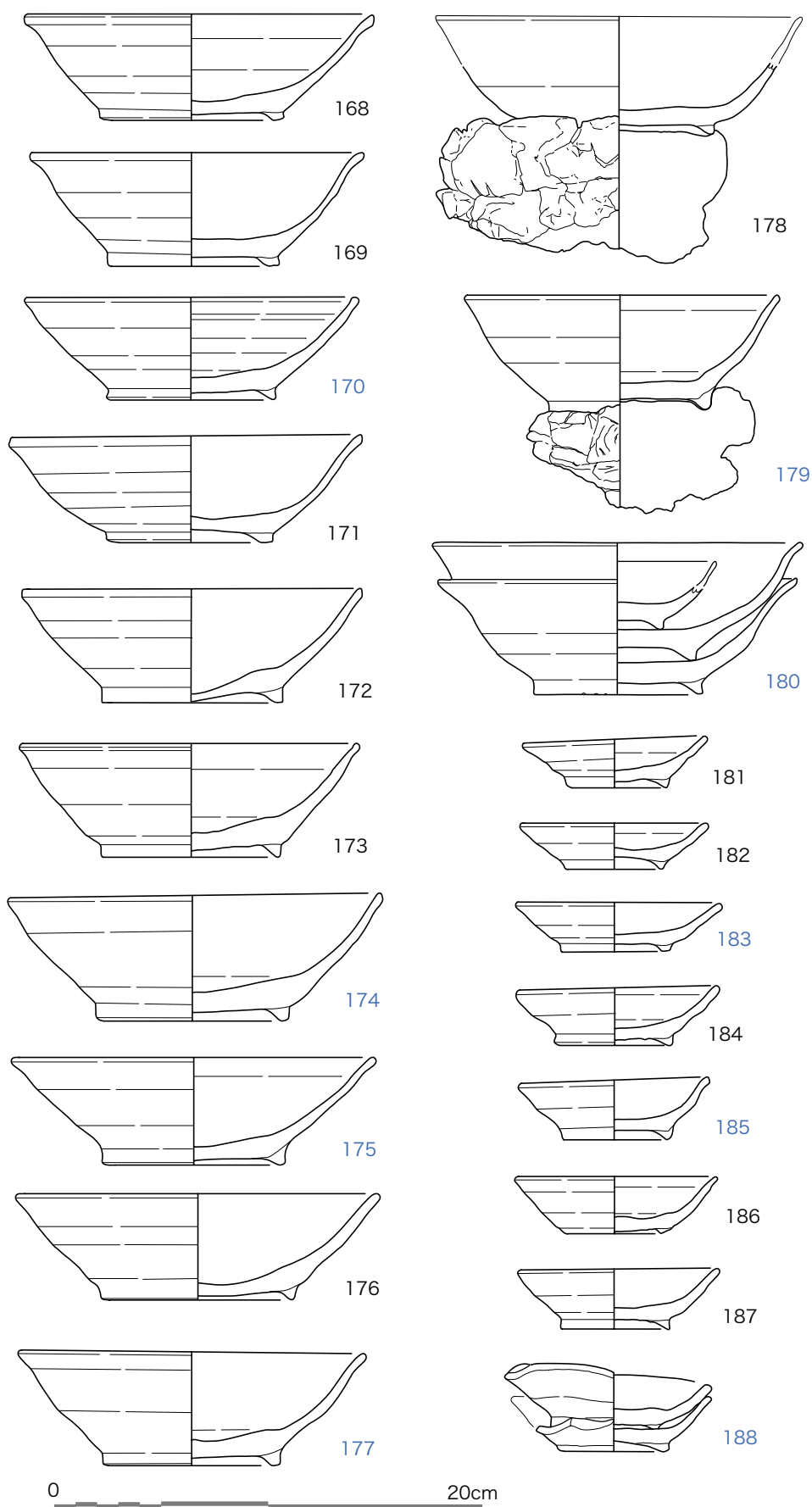


103



0 20cm







170



174



175



175



177



179



180



180

重焼碗の頂部に小碗を置く



152



157



153



159



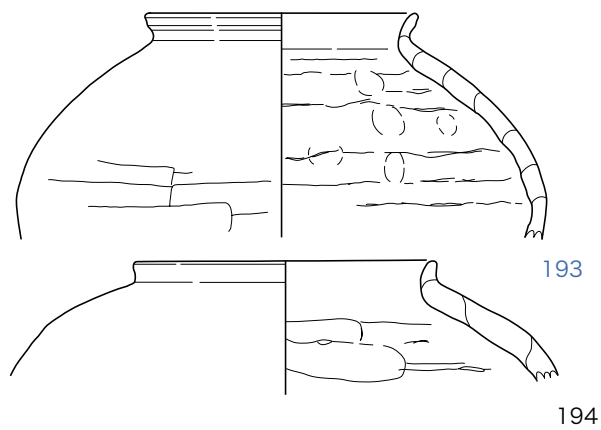
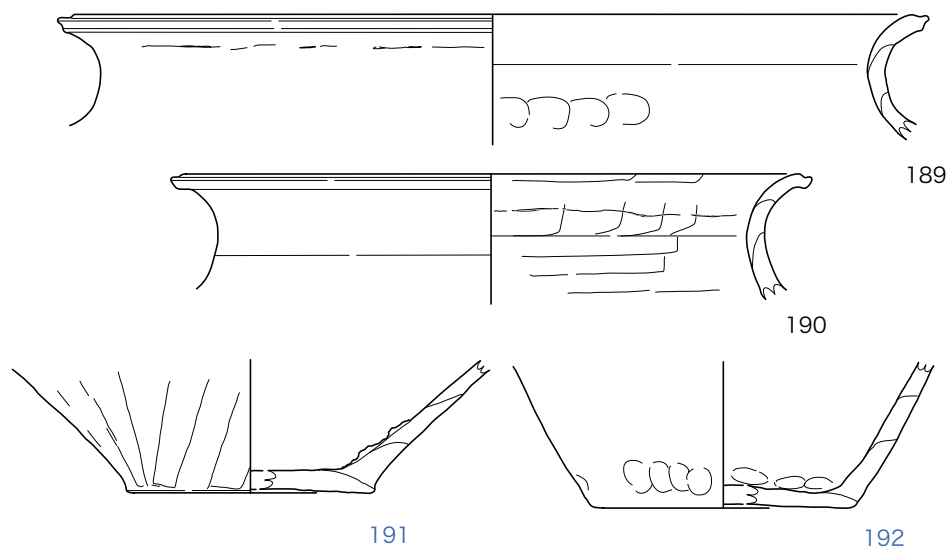
156



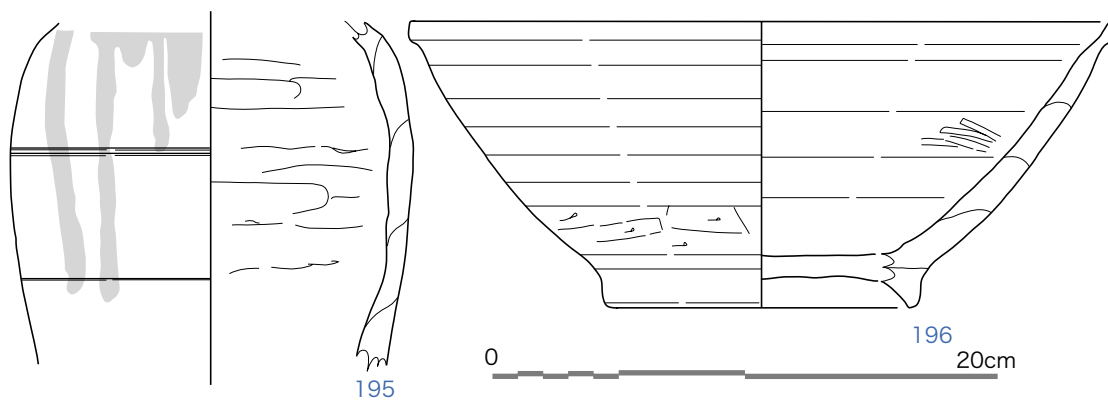
158



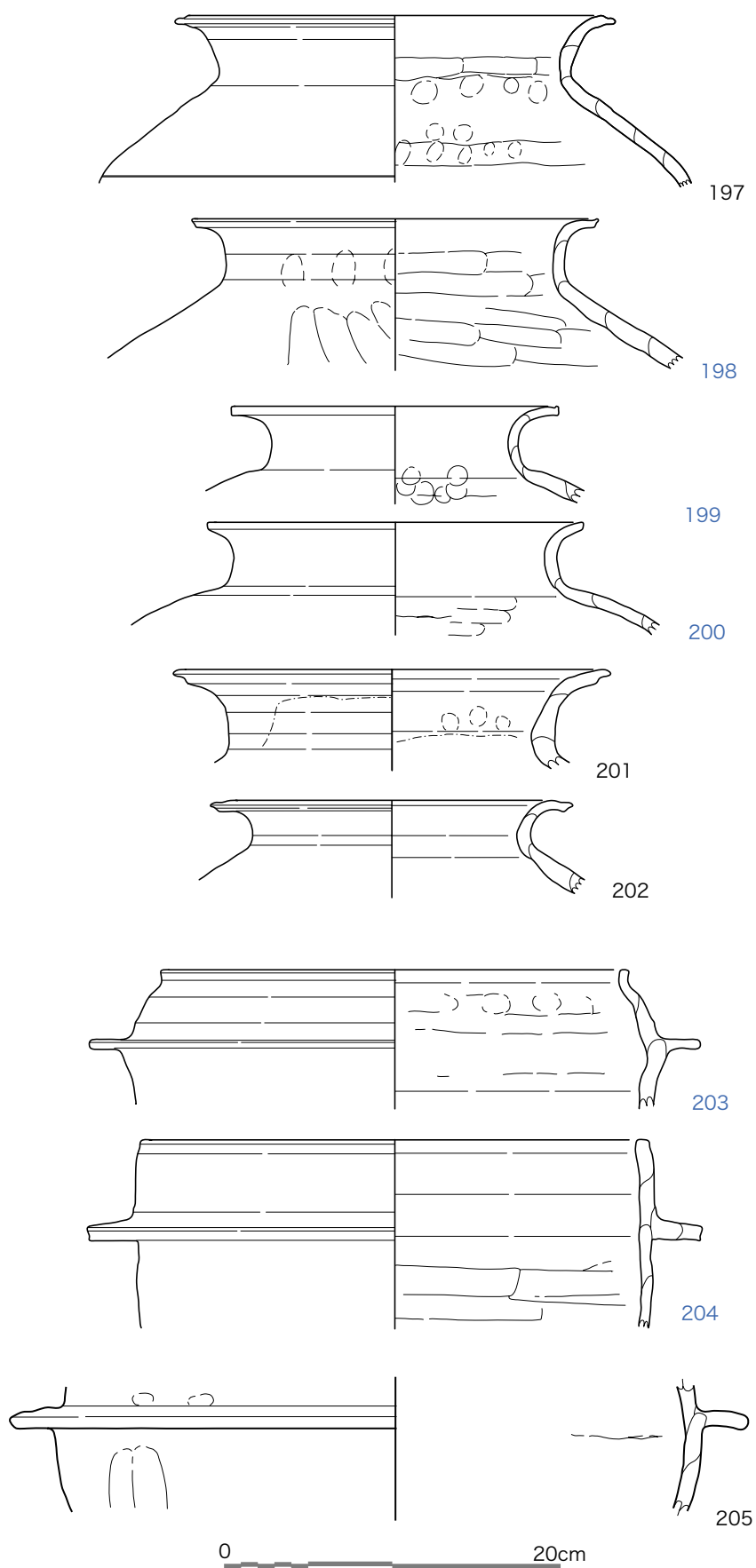
図 28
Ⅱ層
融着資料写真 2

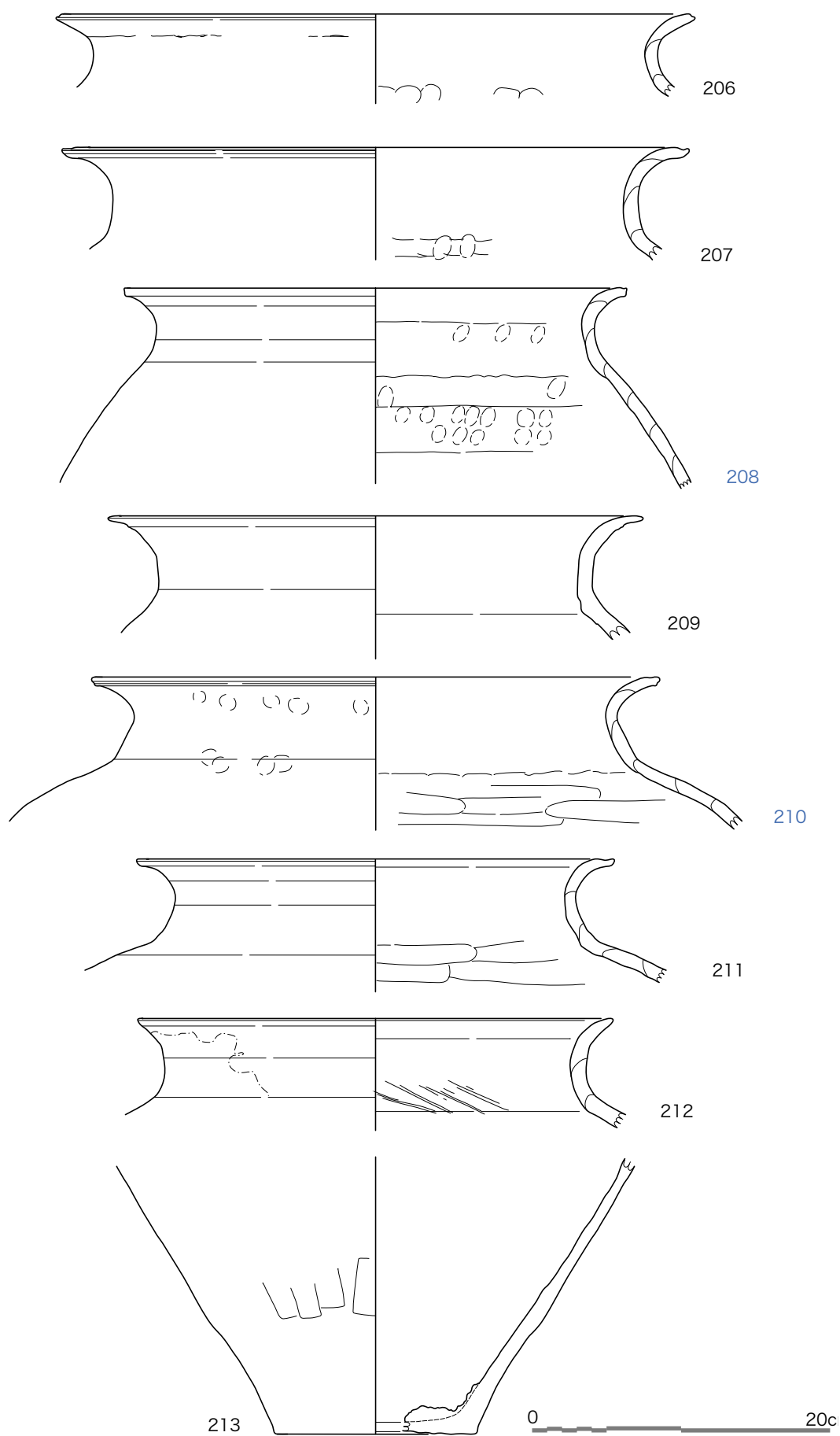


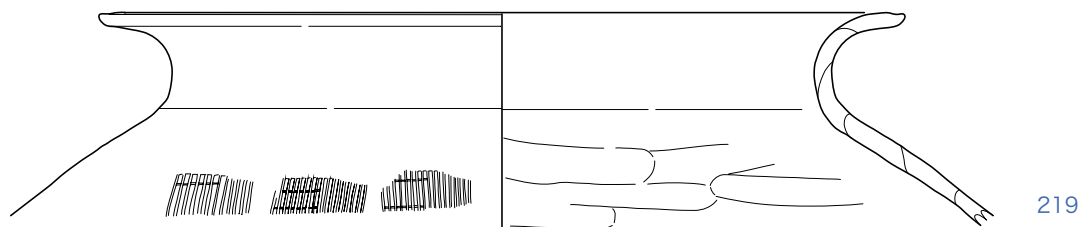
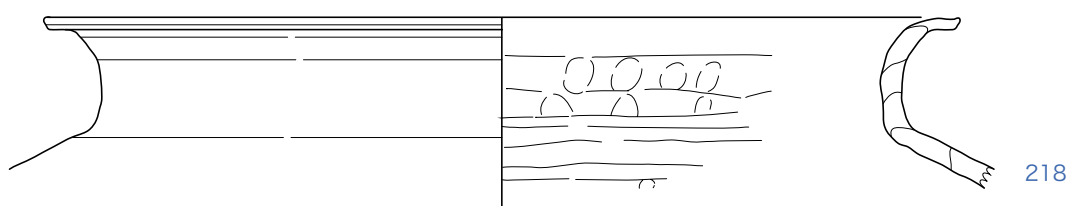
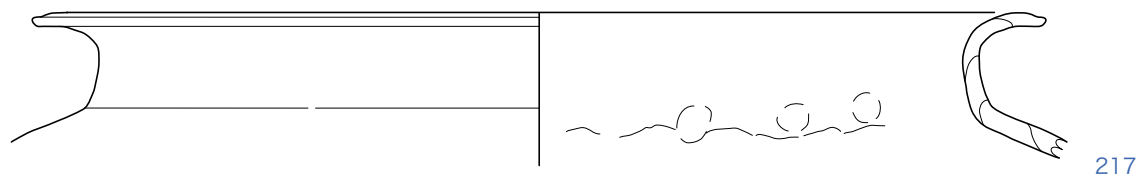
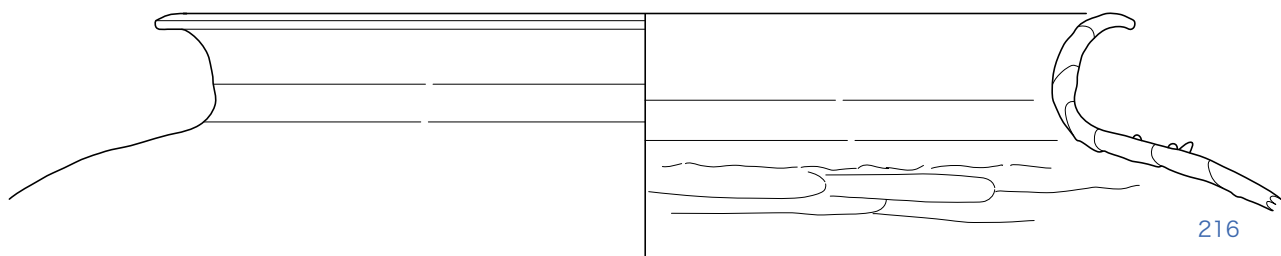
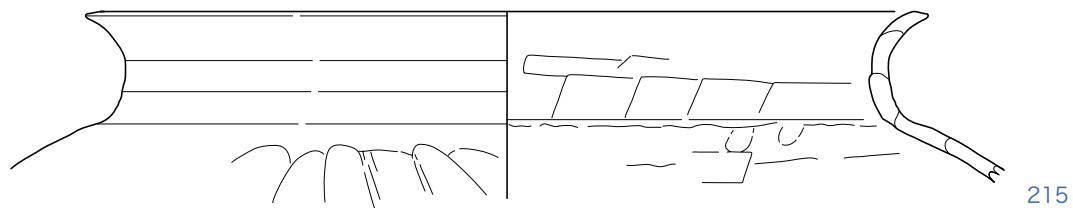
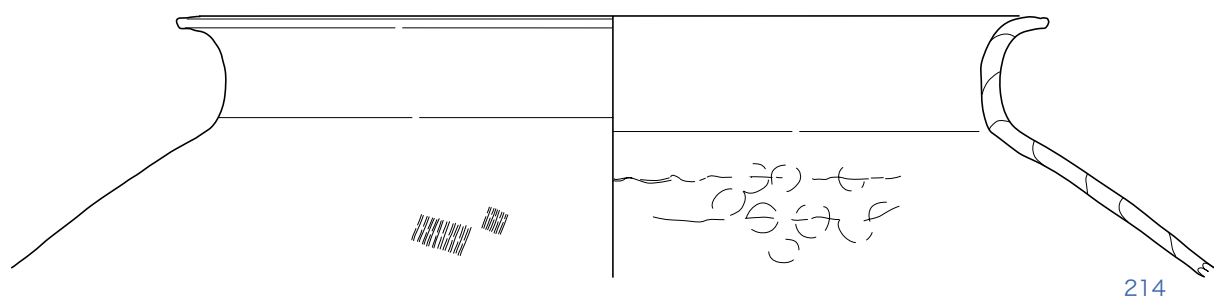
0 20cm



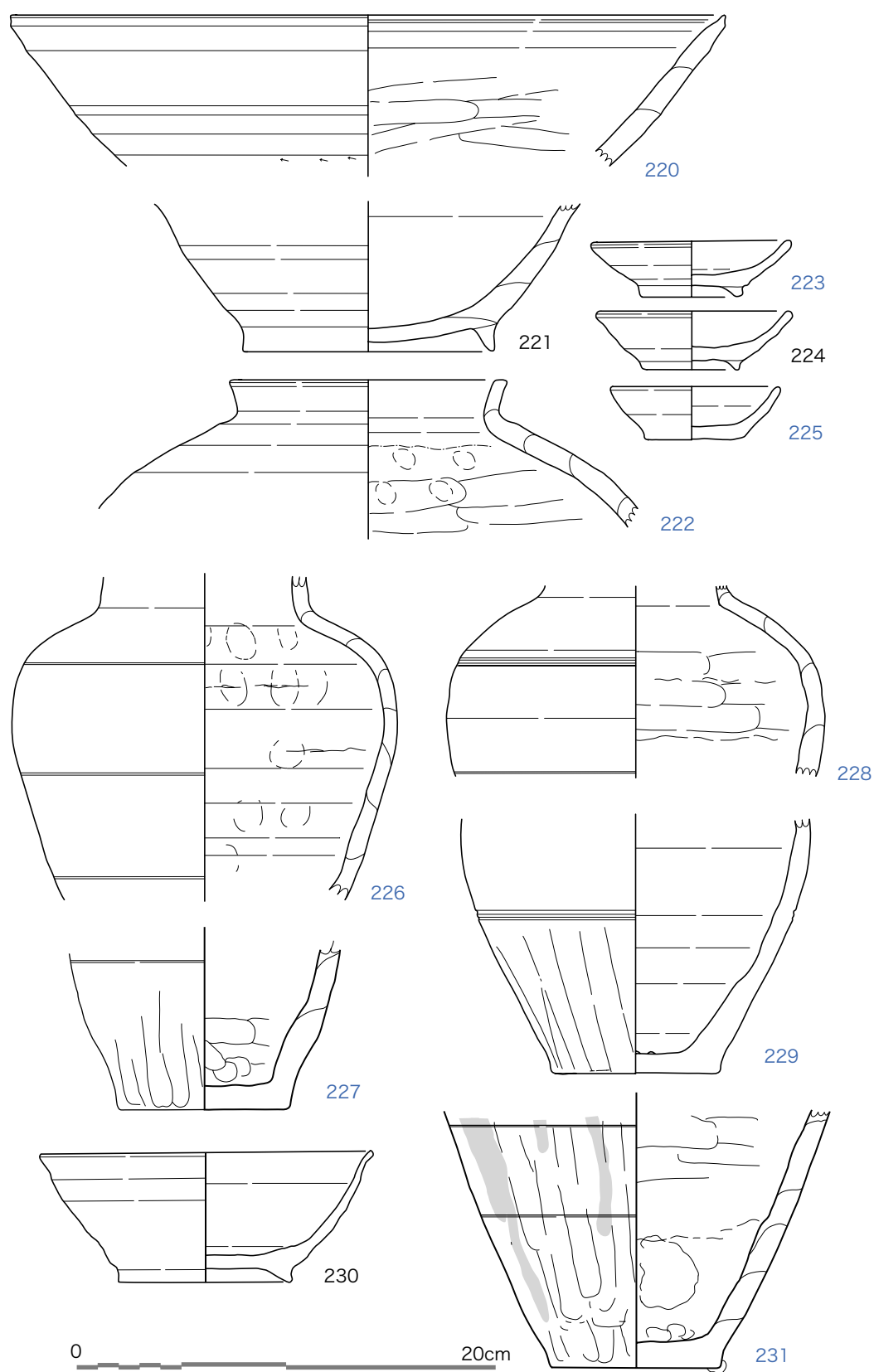
0 20cm

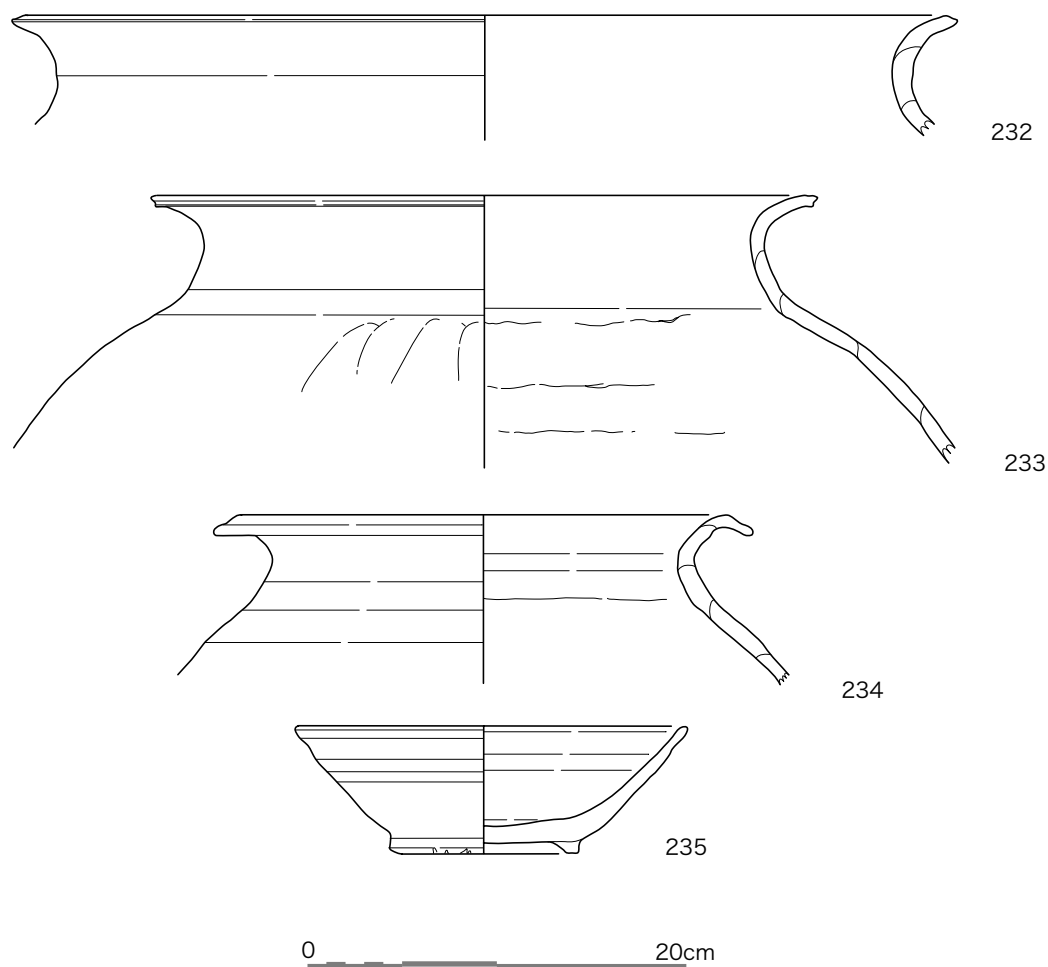






0 20cm





■甕・壺類・その他

I 層からは主に甕・壺類が出土している。甕は体部か頸部にかけて緩やかに腕曲するものが多く、口縁端部は面を有するもの、丸みをもち段を有するものなどが見られる。端部内面は、沈線状やはね上げ状などが存在する。口径は 30 ～ 50cm と不安定。広口壺は口径が 20 ～ 25cm であり、ほぼ甕と同様な口頸部を有するものが多い。三筋壺は 13 点確認でき、体部の文様には複線と単線の両者が見られる。全体の形状を復原できた資料は存在しない。短頸壺は口頸部から体部にかけての資料を含めて 14 点が確認できた。羽釜は 8 点で、鋳部から直線的な口縁部を持つものと内彎状を呈するものが見られる。鉢は 13 点ほどが認められる。なお、I 層出土品は赤羽・中野 2 型式に所属する資料群と思われる。





218



219



222



220



227.229.231



195



226



196



228



203



204

3 融着資料

調査によって大量の融着資料が出土している。ここではこうした重焼によって融着してしまった塊をあらためて整理してみたい。これらの資料は一見何ら意味を持たない資料のように映るのであるが、生産活動の一コマをそのまま封じ込めたものと受け止めれば、興味深い視点が生まれてくる。また総破片数から見ると、碗として約3割にものぼる資料がこうした融着資料である点は驚きである。生産性という観点からも中世窯の実態を再確認できる資料でもある。

■重焼の資料数

融着資料は総数850点で、碗が760点、小碗が90点である。碗の融着状況は2枚が最も多く273点で、碗の枚数と点数は比例して減少する。ただ11枚の融着した資料が26点を数え、それ以上のものは不安定な出土を見せる。13から最大で18枚を重ねたものが見られた。融着資料を碗の数に直すと3356点を数え、現状の碗の総数が8496点であるのに比べるといかに大きな数値であるかがわかる。製品として出荷できる量がどのくらいなのかは計り知れないが、膨大な製品が窯出し段階ですでに非製品と化していた事になる。なお重焼の枚数は13から最大で18枚であり、高さとしては18cmから20cmがおおむねの目安であったと思われる。なお、小碗はほとんどが2から3枚の融着資料であり、最大が10枚で、8枚前後を重ねるものが一般的であったようである。ただし後述するが小碗の窯詰めは極めて多様なあり方を示す。

■重焼資料と型式

碗の融着資料を詳細に観察していくと、そこに存在する碗の形は、おおむね同様な大きさや類似する形を留めるものが多数を占めることがわかる。つまり同じ型式の碗を重ねて窯詰めすることが基本であったと考えられよう。そしてその多くがまさに同じ製作者の手によるものである可能性が高い。碗を製作して乾燥するが、その後にただちに同じ製作環境下で重ねていくと想定することができよう。ただし例外もある。557の資料は明らかに型式が異なる。こうした僅かな例外を除くと、以下のような製作風景が復原できよう。すなわち製作者は一定の型式を慣習的に守りながら碗の大きさや形をイメージして製作する。その後に窯詰め用に、碗を一定の高さに重ねて行く。このことから上手く抽出できれば製作者とその作品群を読み取ることができる。

小碗の窯内の設置は様々な方法があるようで、特に碗の重焼の最頂部に1枚だけを置く場合が多々見られる。また時には、右写真のように、重焼資料の最頂部に特異な口径を有する碗を置く場合も確認できる。一般的な碗の口径とは一回り小さいもので、いわゆる法量分化されたような資料と思われるが、他に類例がなく例外的な資料と理解したい。



524



557 (異なる形式の重焼)



236

図 37 融着資料写真

■融着分離材

碗や小碗を重ねる場合に、融着を避ける方法として様々な方法がある。この時期は特定の窯道具の資料は見られないので分離材を置くことが一般的である。大きくわけて2種類のものが認められる。一つは砂、他は粘土の資料である。前者から後者が編年的な把握であり、本資料群はその過渡的な様相を示すものである。

まず砂の使用であるが、融着資料や碗類に痕跡的に残る資料を概観すると、第1に一定の大きさの砂粒を使用している。つまり選別された細粒砂が離れ砂として用いられたことになる。当然のようにそうした一定の粒子を集めて集積しておく必要があり、専用の離れ砂が事前に用意されている工程を作り上げる必要がある。離れ砂の使用は本遺物群では一般的であったことが碗や小碗の高台部付近の観察からうかがうことができる。高台底部に残る極く微妙な凹凸の痕跡はこうした離れ砂の使用を推測させるものであろう。

資料を概観すると砂を主体的に分離材として活用したものと、加えて粘土と混在させるものと、砂の使用は見られずに粘土だけにたよる場合の3つの方法が見られる。前者から後者への編年的な移行を容易に推測することができる。それは道具としての分離材の簡素化を志向したものと評価できようが、砂から粘土への転換が、効率性や生産性どう係わっていたのかは別の観点から整理する必要がある。いずれにしろ本資料群の製作環境は、事前に選別した専用分離材を用意する場合と、粘土を集積しておく場合が混在する。

なお、砂・砂と粘土・粘土という3つの状況と碗の型式とは整合性をもたないようである。例えばⅡ層内出土資料を概観すると、砂を志向する資料が多くを占め、粘土の利用は少数に留まる。そしてその粘土の使用が特定型式にまとまるかというところでもない。ここでは碗の型式と製作者の関係に言及できないが、分離材として手ごろな素材としての粘土の発見が、急速に製作環境に拡大して行ったことは想像に難くない。



446 碗内面 分離材痕跡 (離砂)



115 小碗 分離材痕跡 (離砂)

図 38 融着分離材資料写真

4 その他

■窯詰め

窯体の調査が実施されていないので、具体的には言及できないが、残された灰層中の資料から類推してみたい。基本的には標準的な中世窯の椀焼成と何ら変化は見られない。右写真の馬蹄形焼台を多用したことは明らかである。椀の融着資料からも同様な状況であるが、多々窯壁面を含めて剥離した資料が見られる。具体的な椀の窯詰めは、前述したようにはおおむね 13 から 16 枚前後を重ね、高さは 18cm から 20cm ほどが目安となっているが、窯体の設置場所により前後する。

ところで興味深いのは小椀である。基本的には椀と同様に 8 から 10 枚ほどの小椀を重ねて配置するようであり、斜面の充填に焼台を使っている。その他に椀の重焼の最頂部に 1 点単位で配置した様子が多々見られる (図 26)。さらに隙間に単体で置くなど、補完的な扱い方が想定でき、多様な状況が見られる。

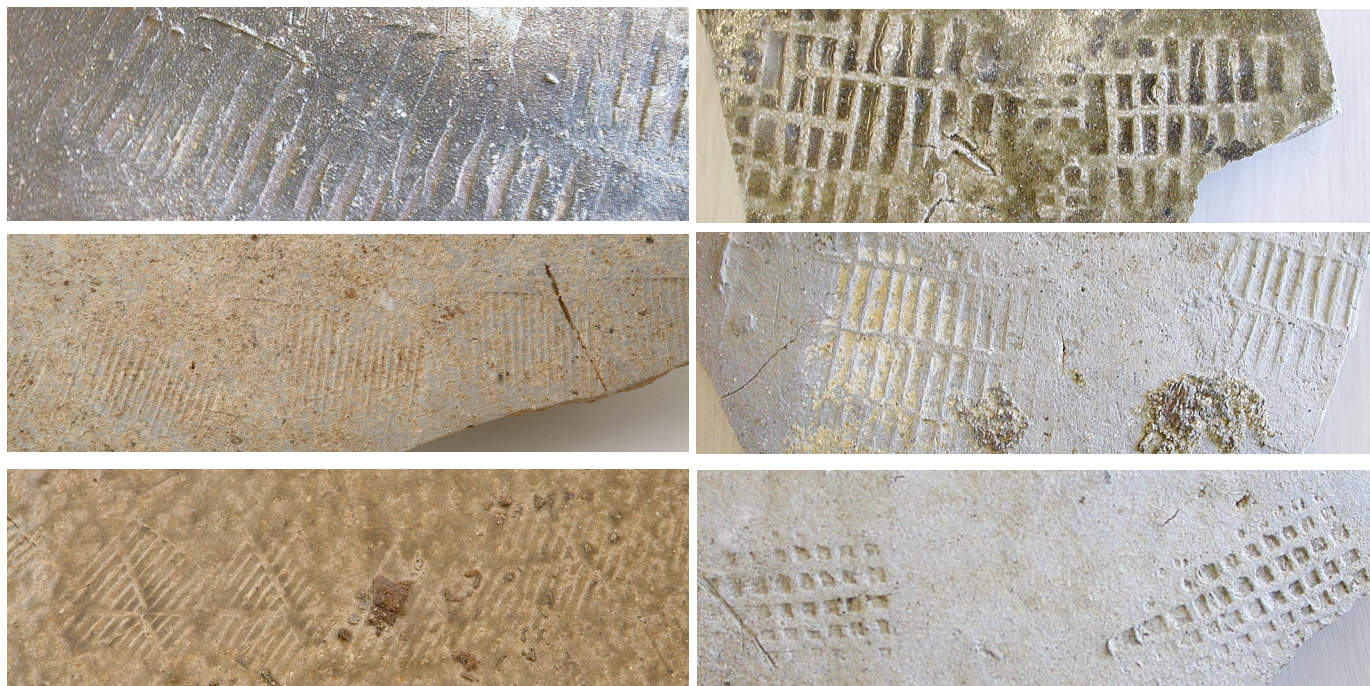
■押印文

I 層を中心にして甕・壺が出土している。その体部に見られる押印文は帯状に押捺されることが一般的であるが、連続的な資料も散見できるが、やや間隔を保ち施される資料が多いように思われる。いずれにしる形状全体を把握できる資料がなく、ここでは種類のみをまとめておきたい。

大きく 3 つのものがあ、一つは長方形の原体に平行線を刻んだものであり、今一つは平行線に斜十字を加えたもの。そして長方形・方形を含めた格子目状になるものである。種類も多様であり、かつその施す道具やその方法も多様なものが混在する。



図 39 充填材と押印文





15 (離砂・粉)



336 (離砂)



412 内面 (離砂)



32 (離砂・粉)



301 (離砂・粉)



412 (離砂)



423 (離砂)



381 (離砂)



419



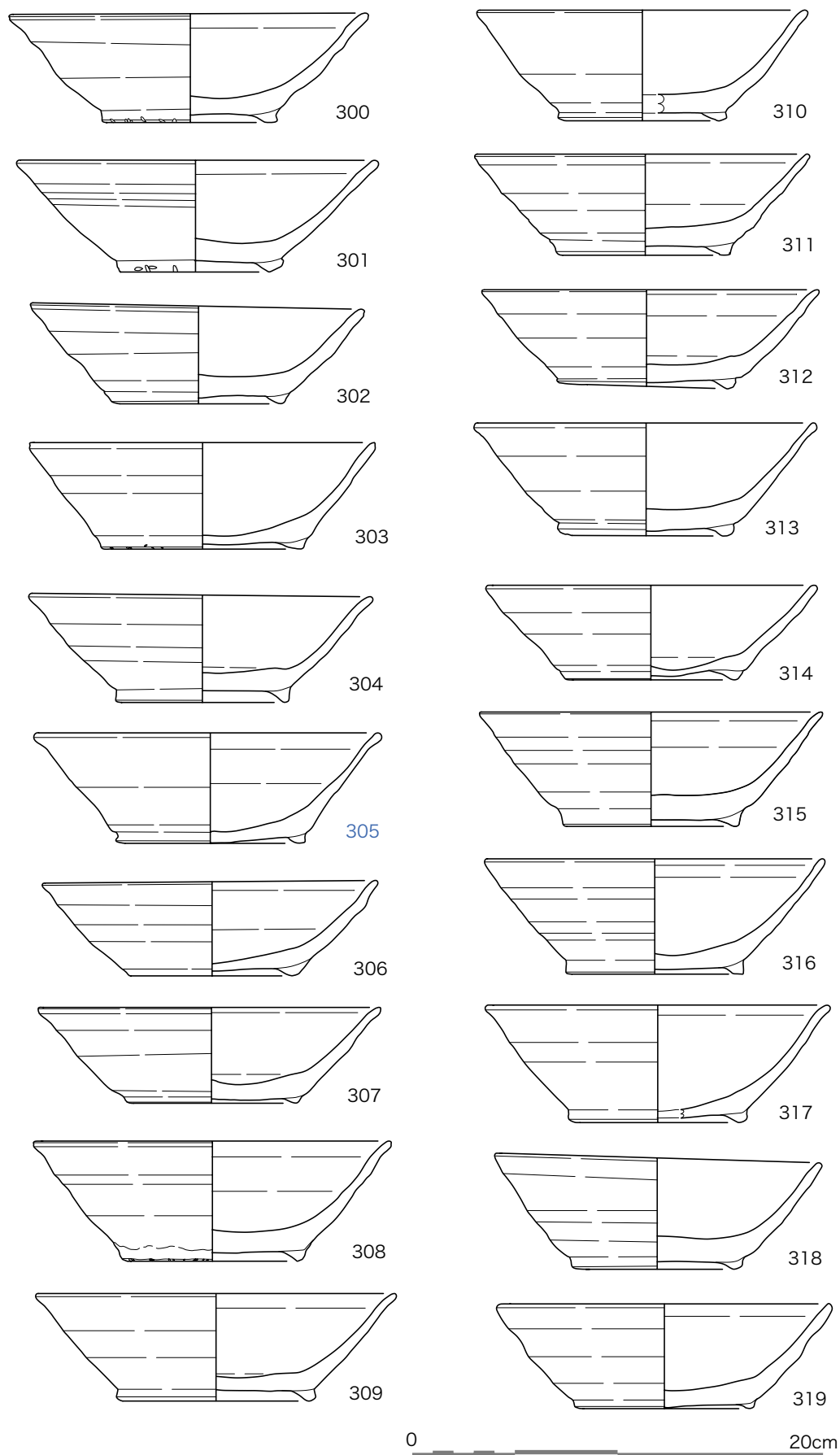
349 (粉痕)

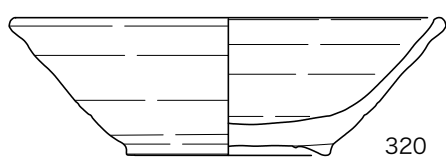


35 (粉痕)

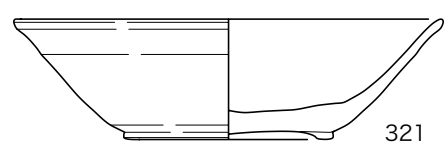


102 (砂痕)

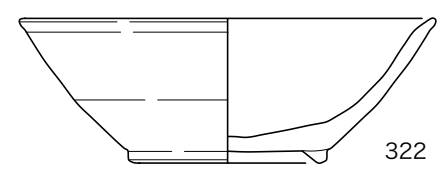




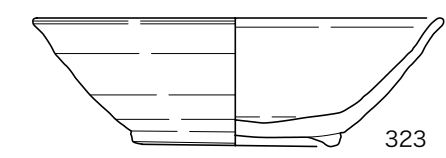
320



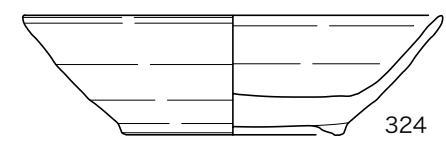
321



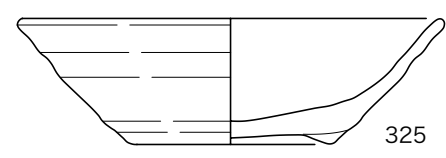
322



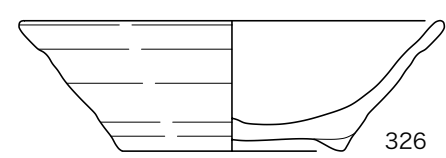
323



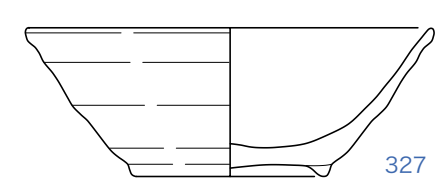
324



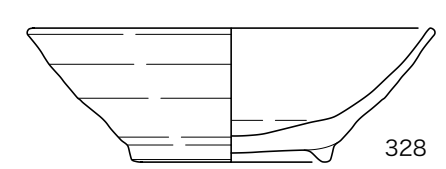
325



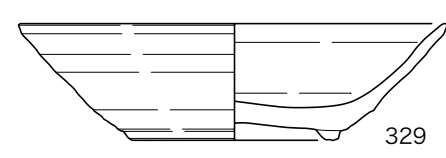
326



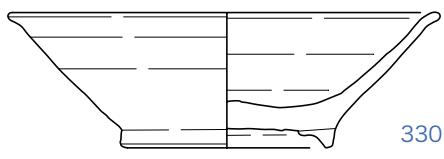
327



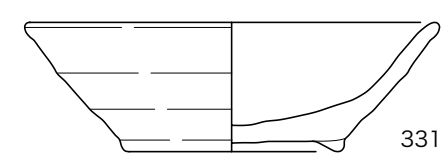
328



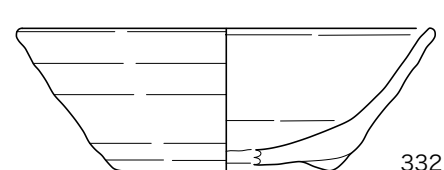
329



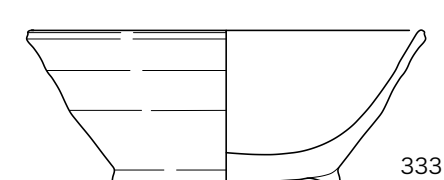
330



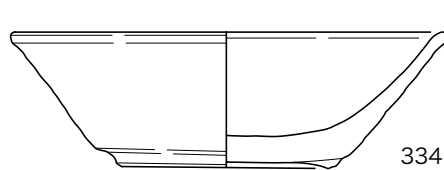
331



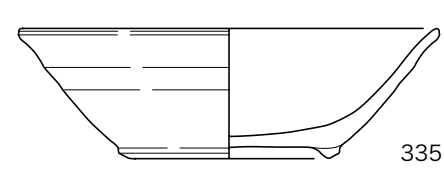
332



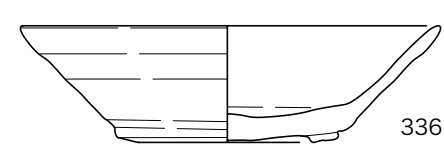
333



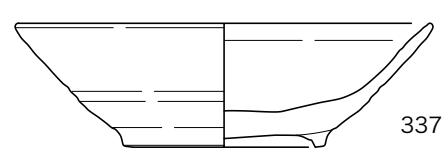
334



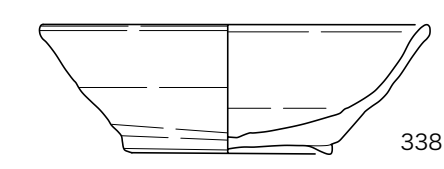
335



336

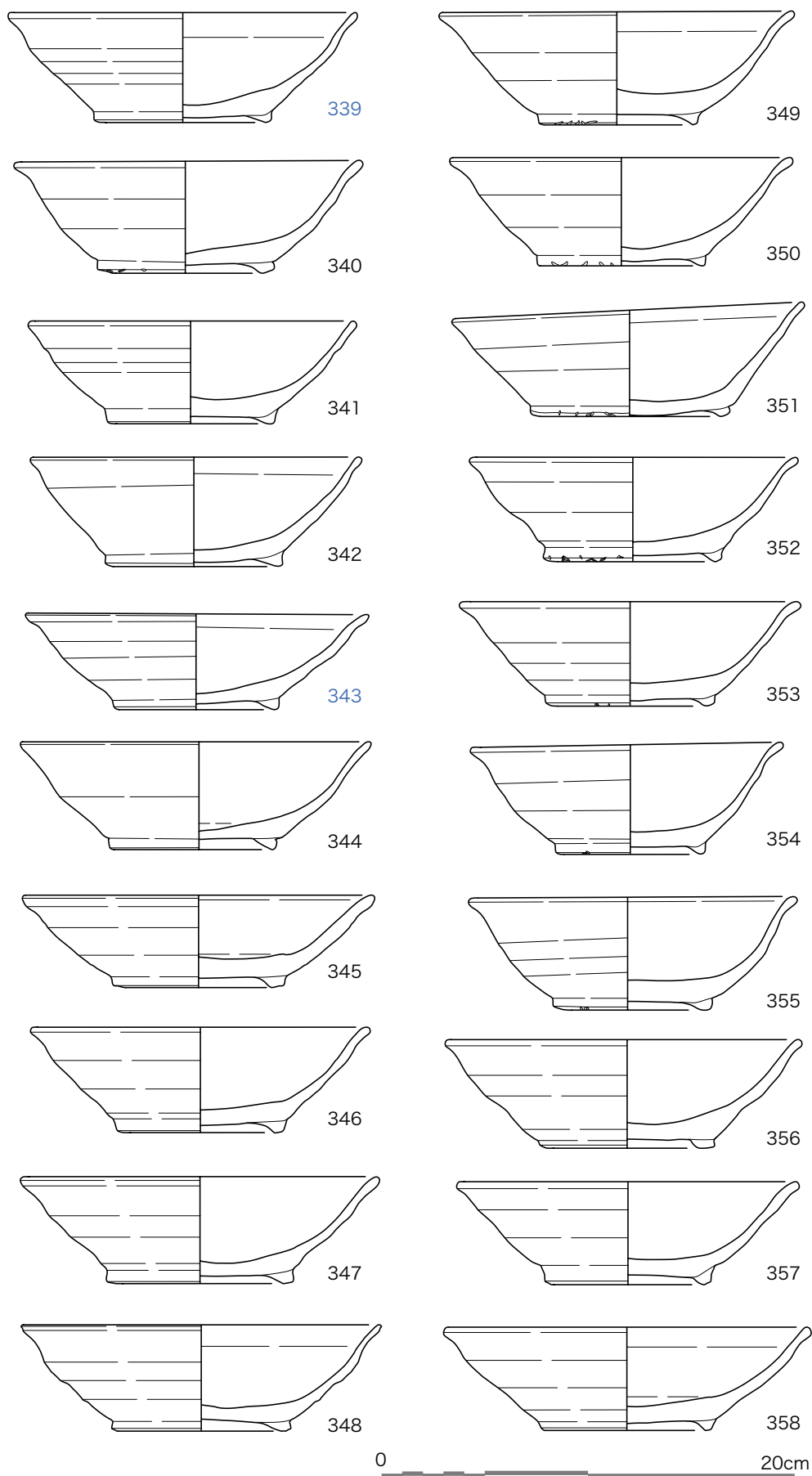


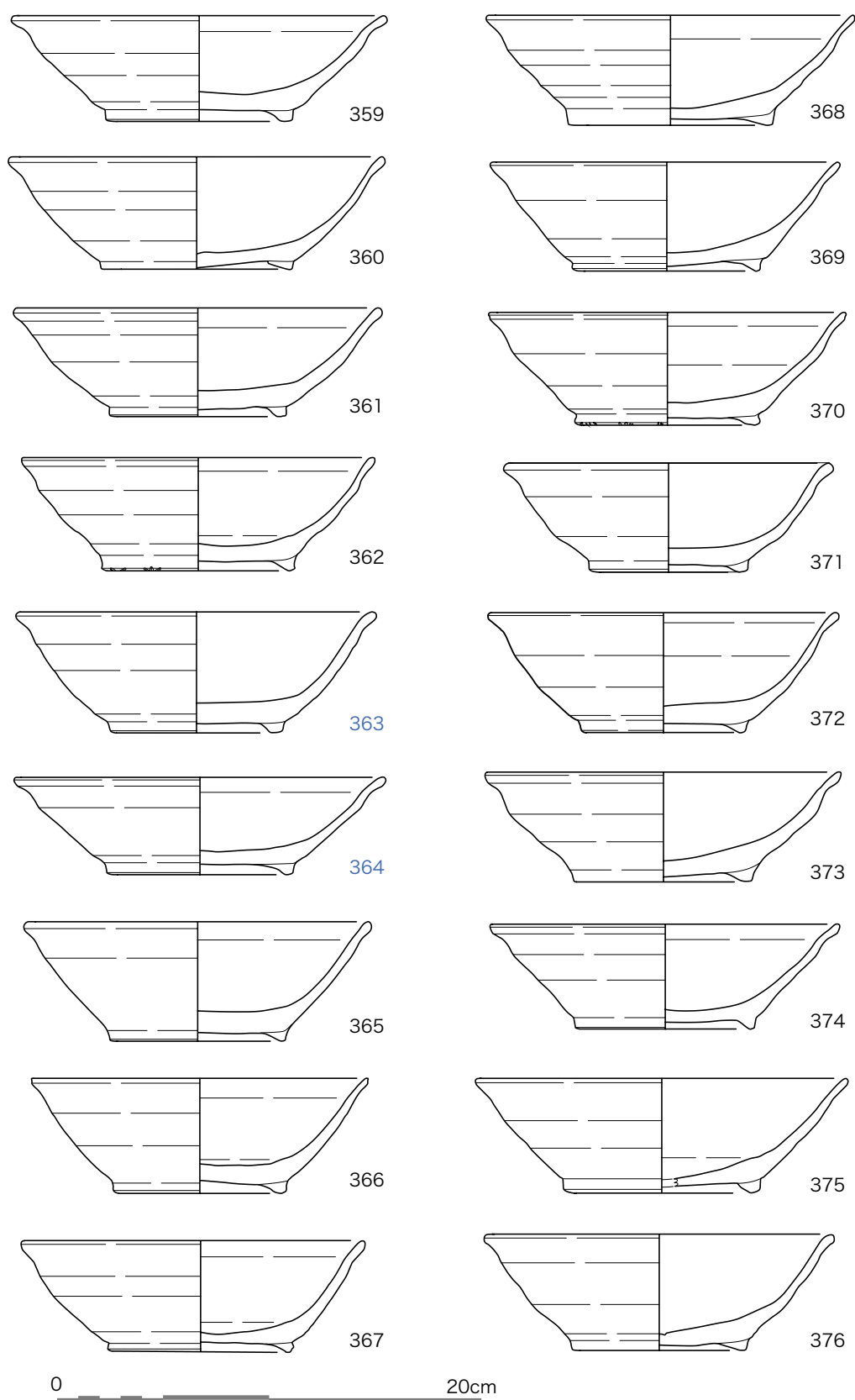
337

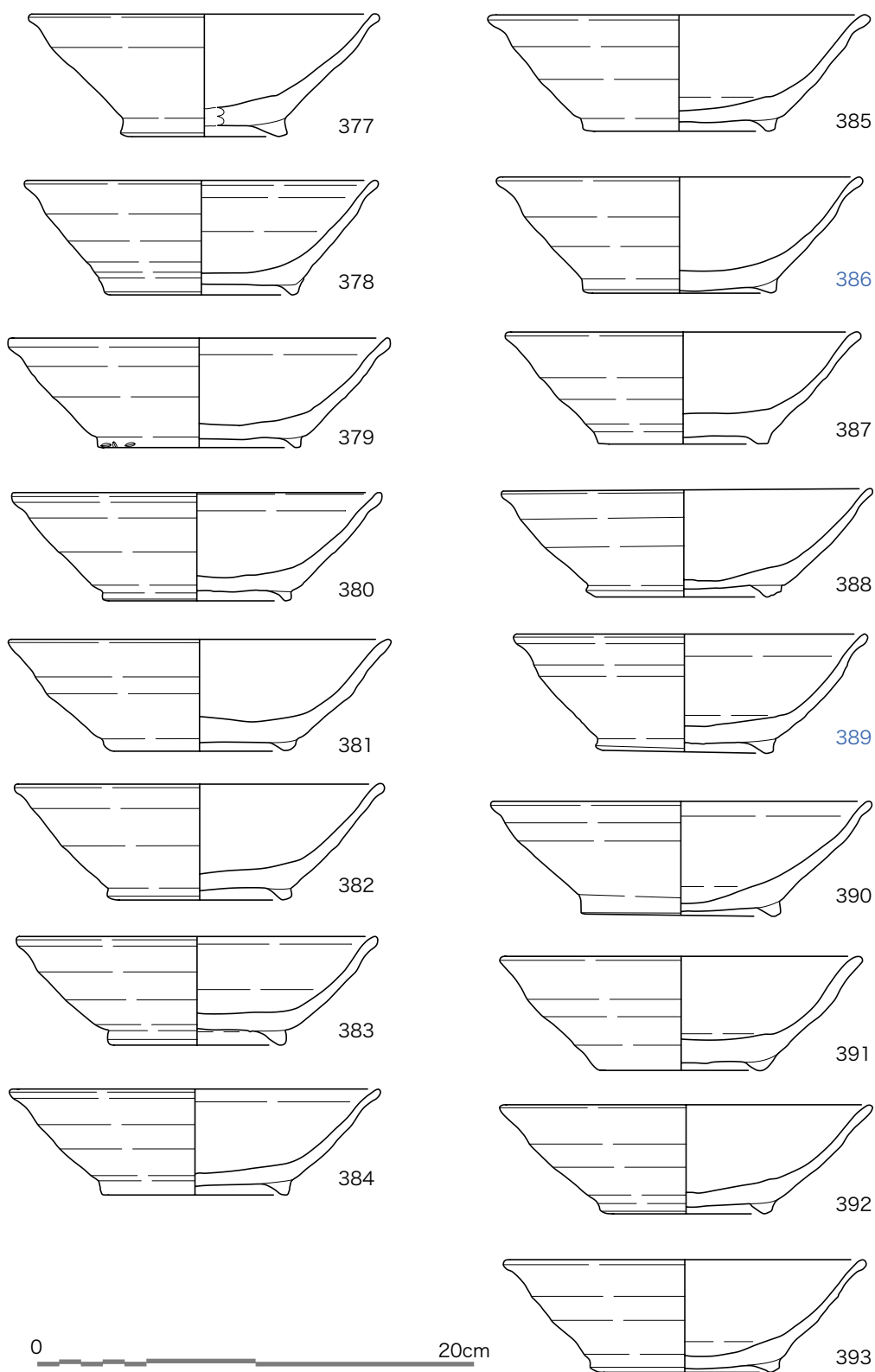


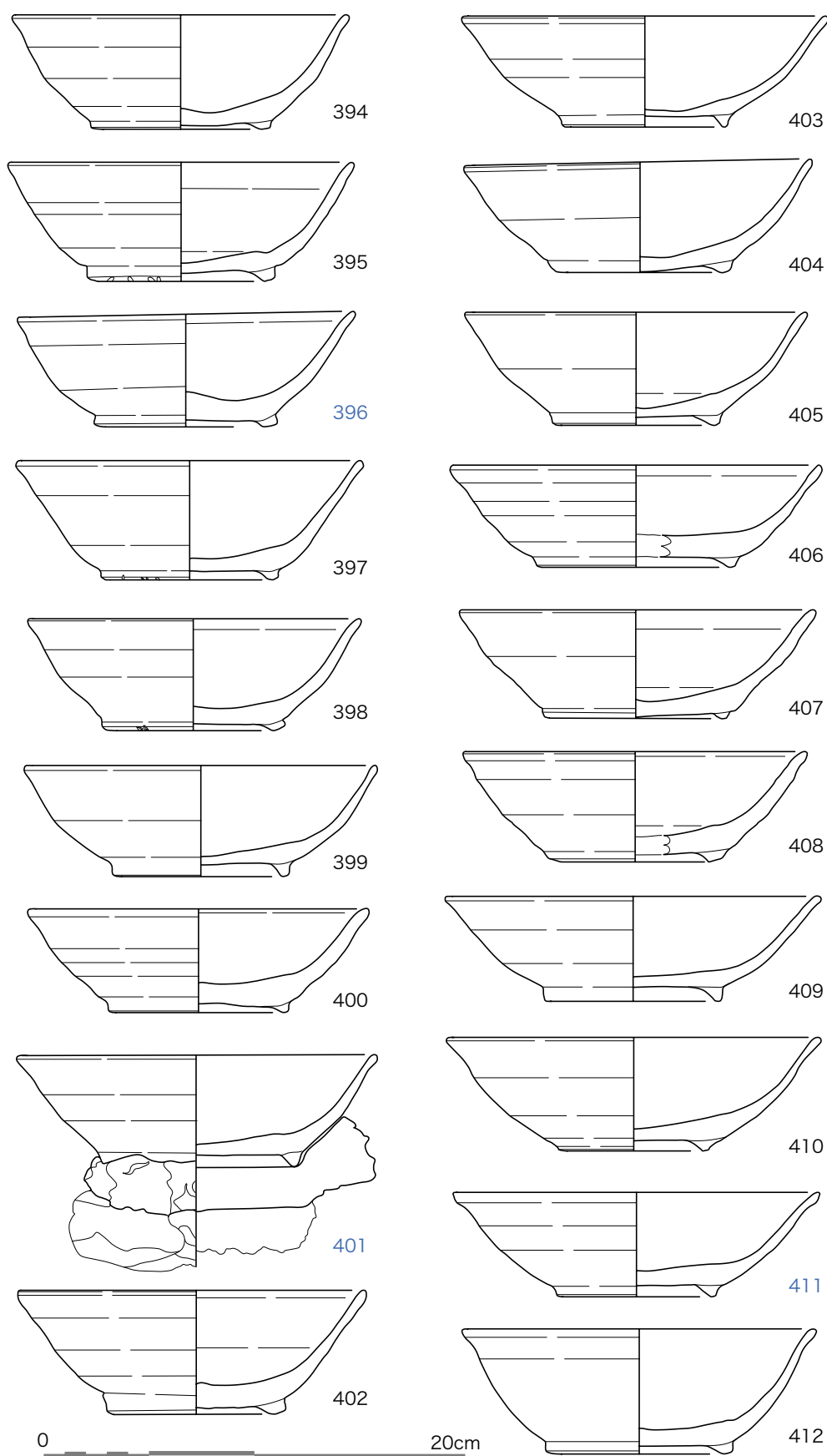
338

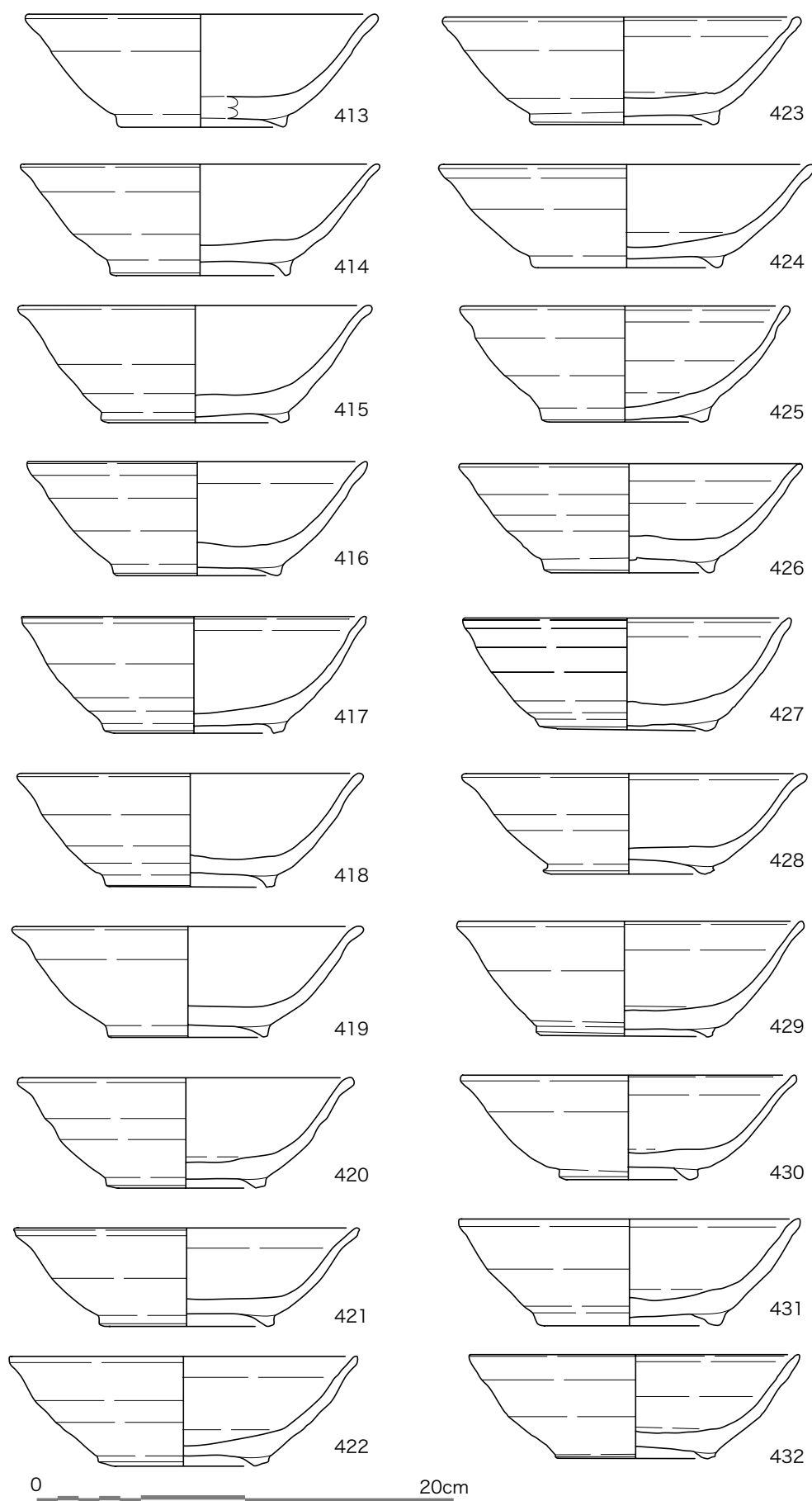


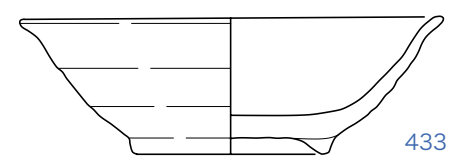




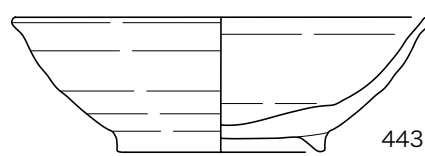




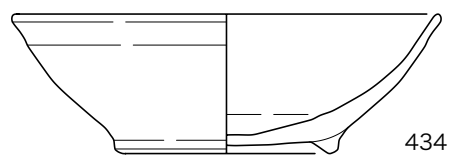




433



443



434



435



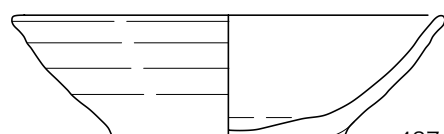
444



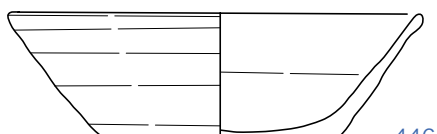
436



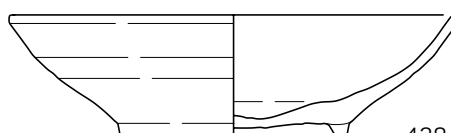
445



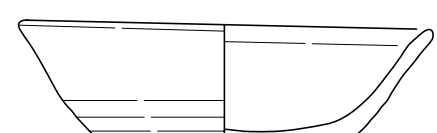
437



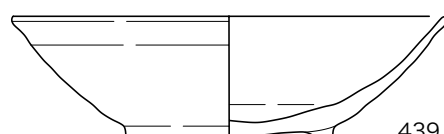
446



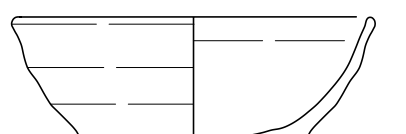
438



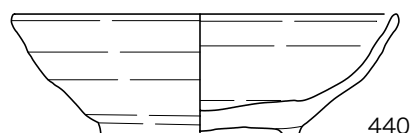
447



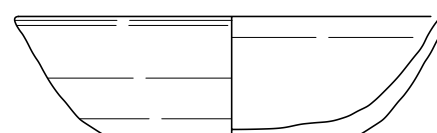
439



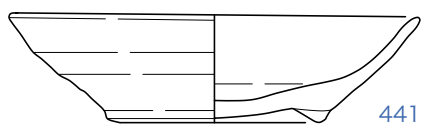
448



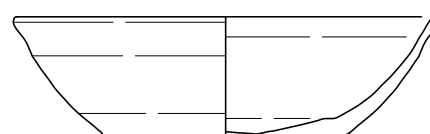
440



449



441

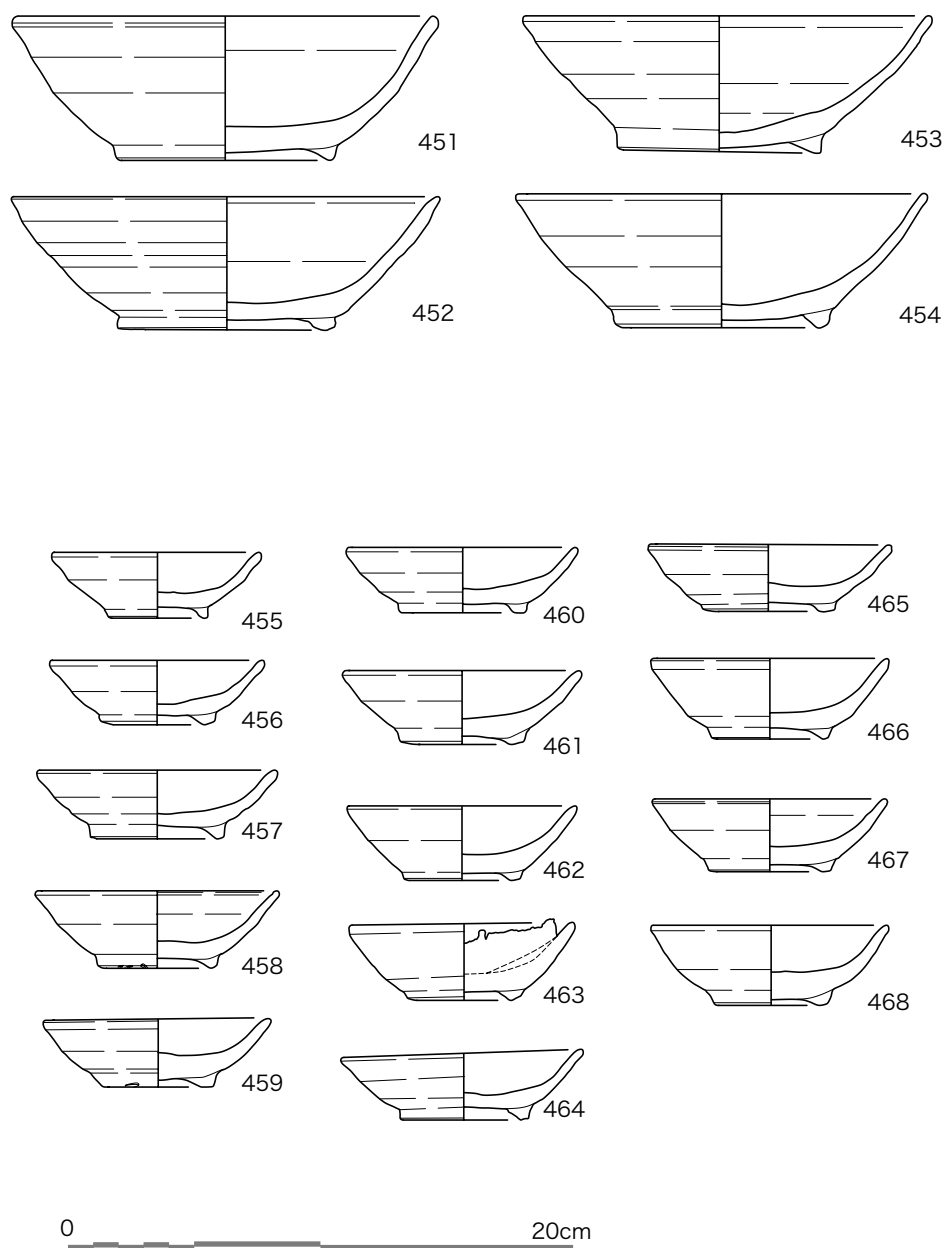


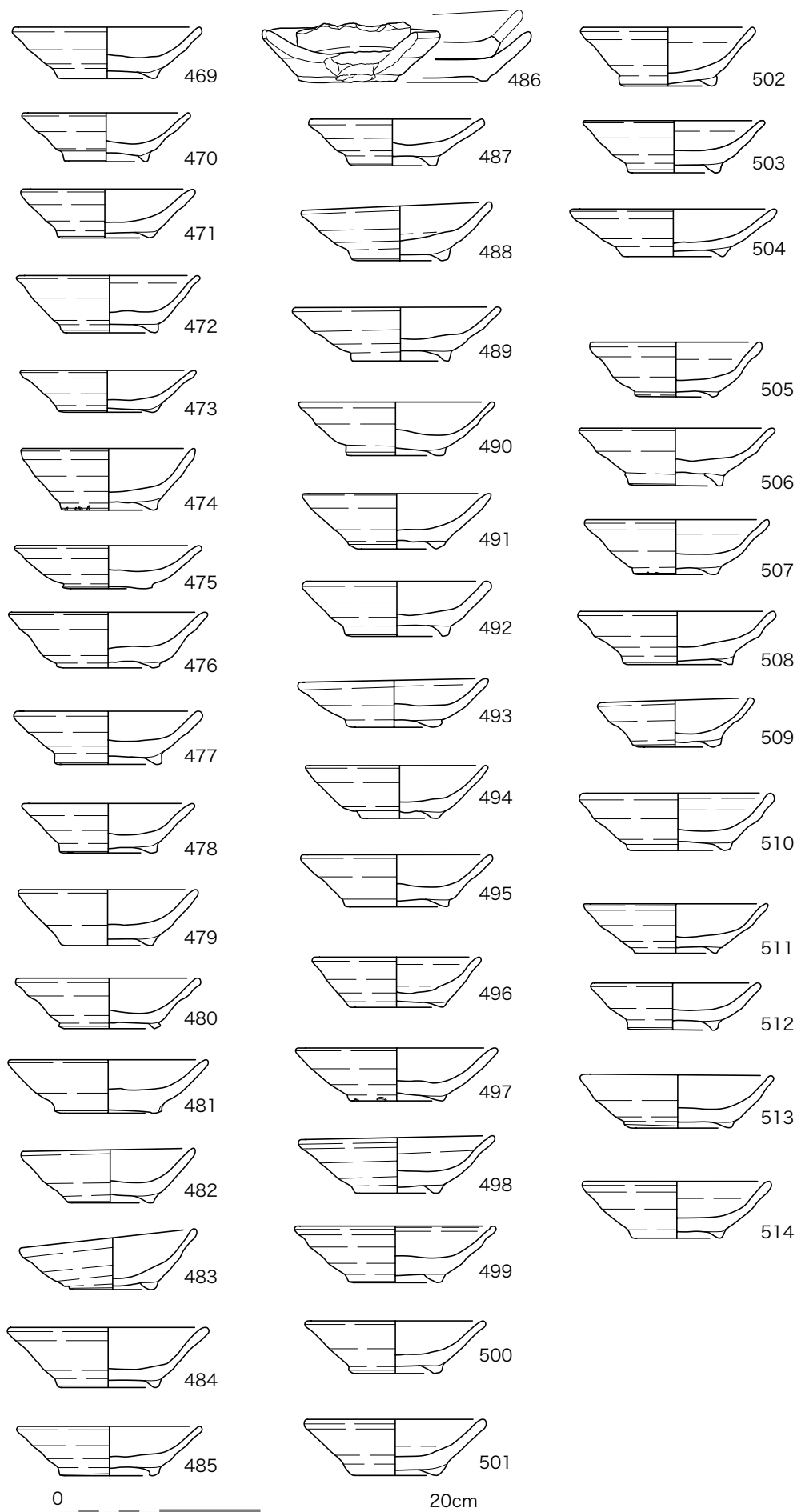
450



442

0 20cm







305



364



411



327



386



433



330



389



444



339



396



445



343



401



446



363



441



447



538



543



548



539



544



549



540



545



550



541



547



542

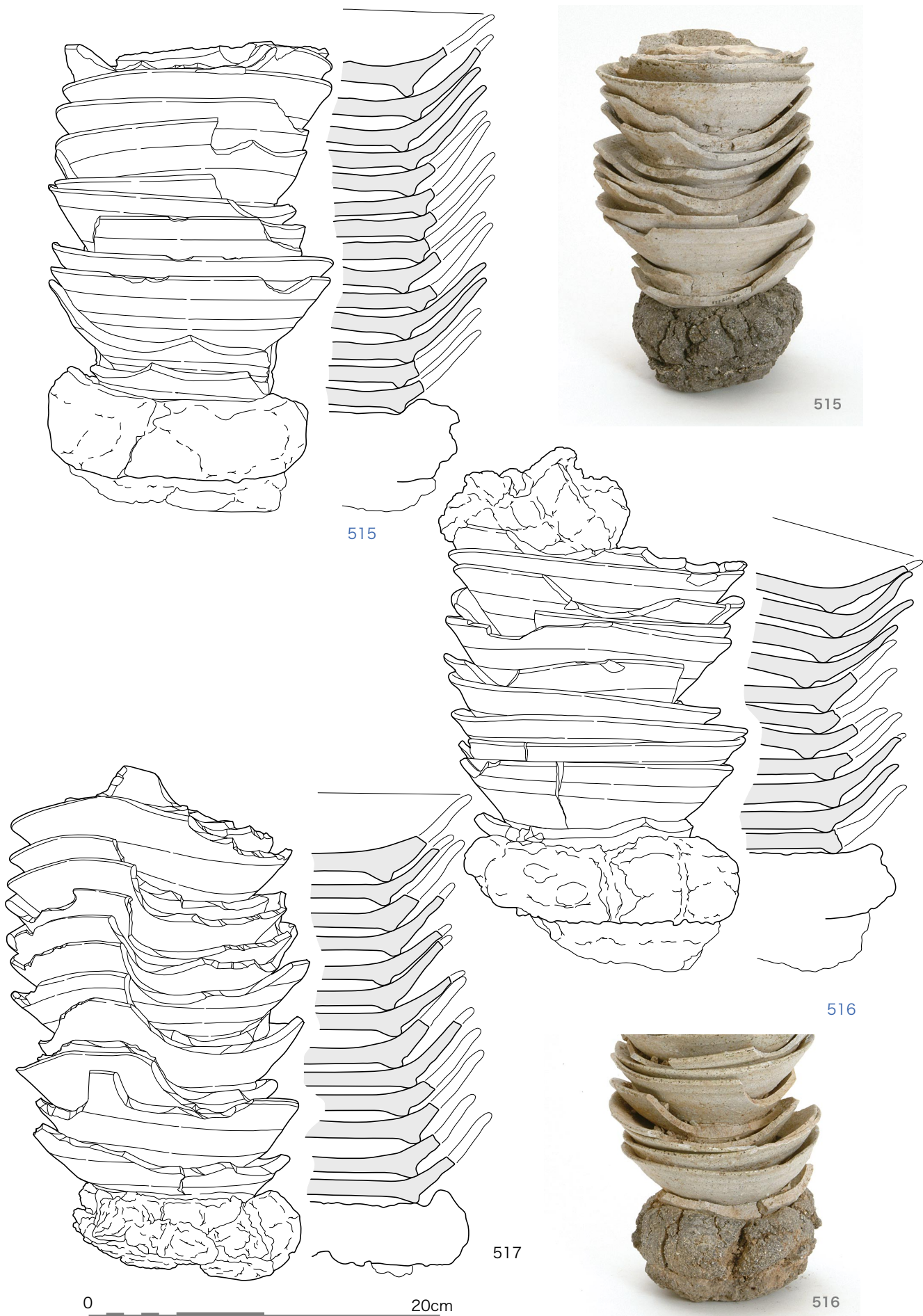


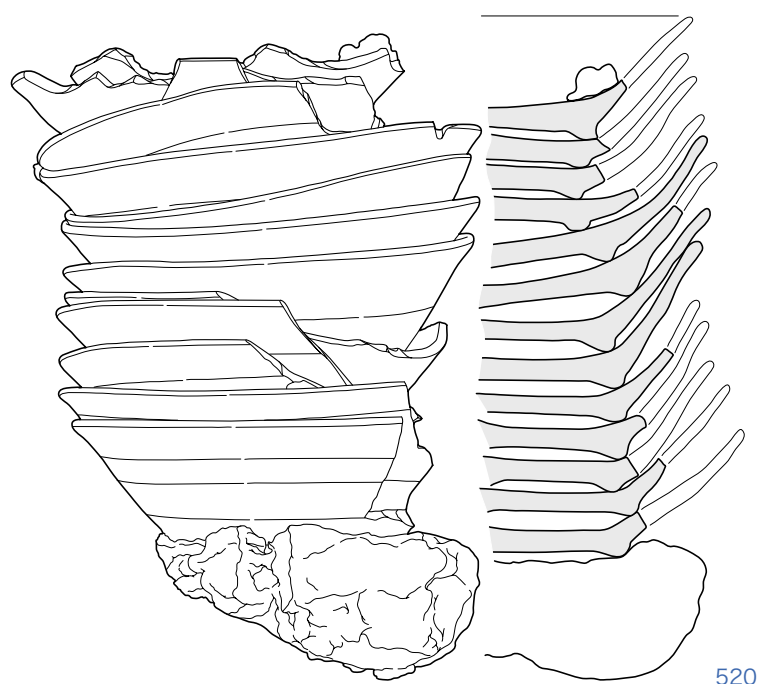
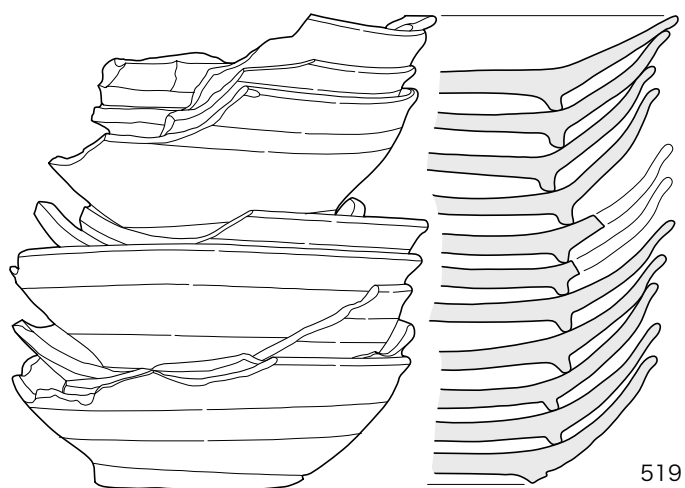
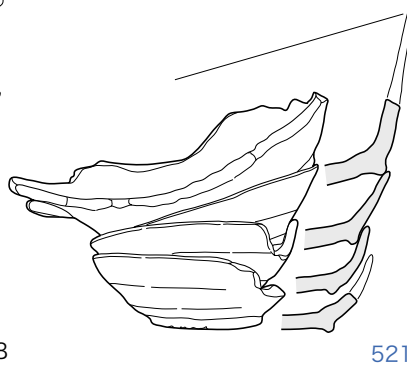
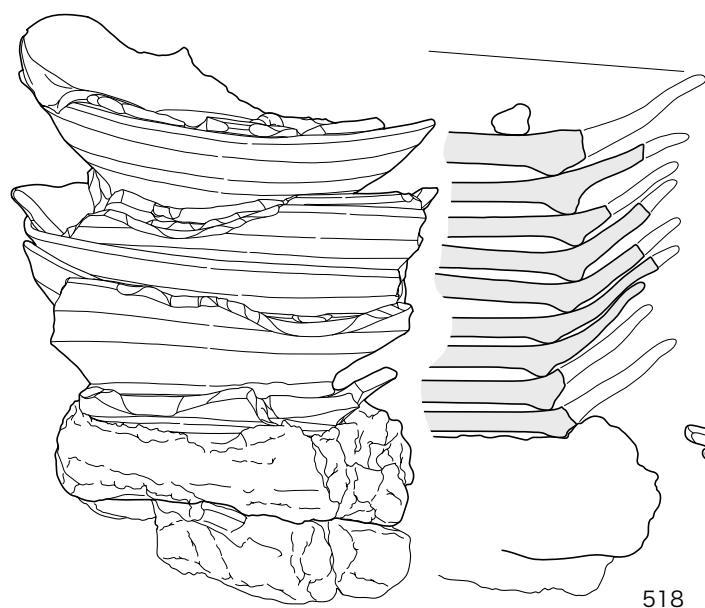
559



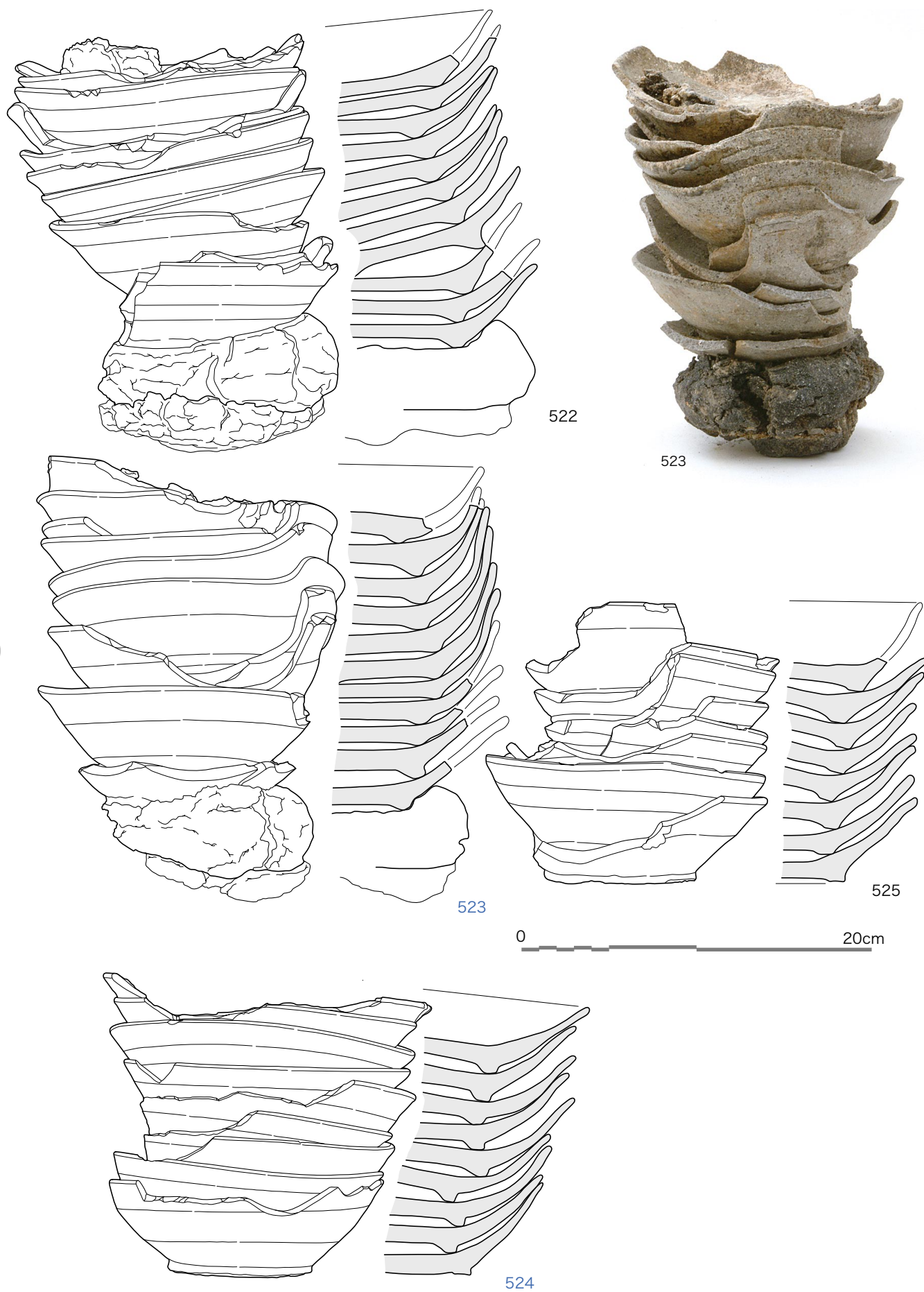
546

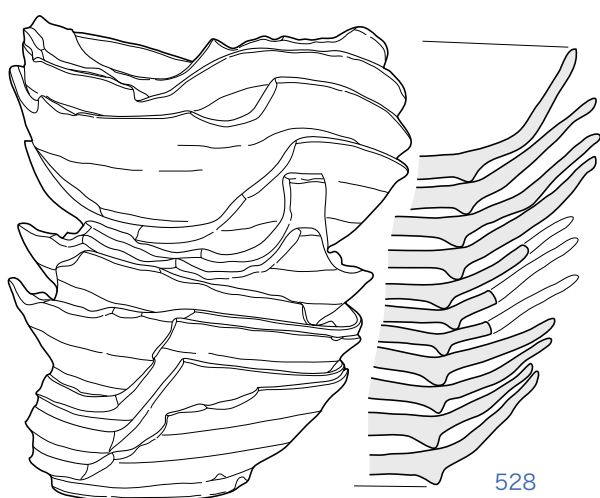
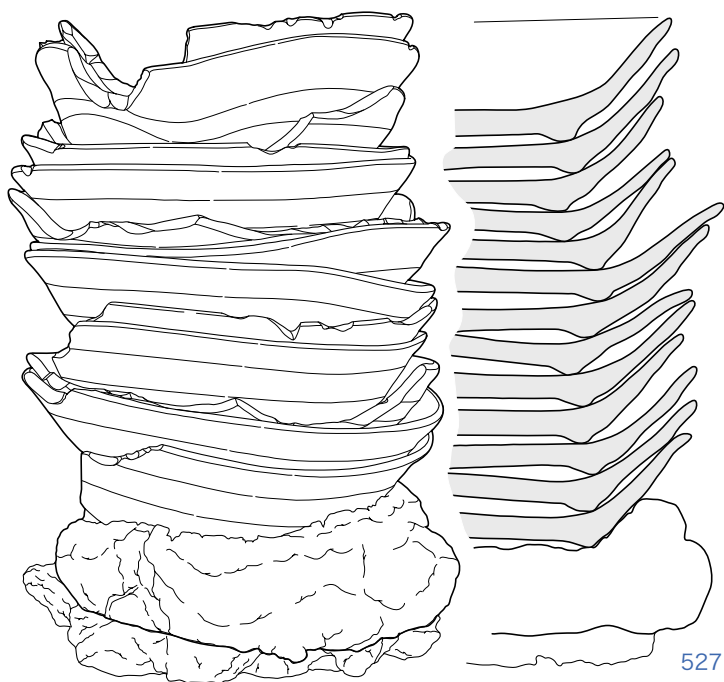
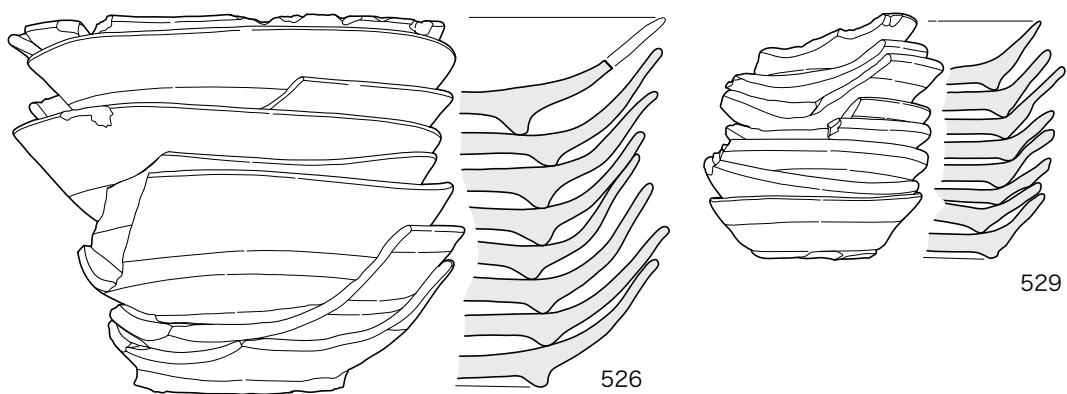
图 53
融着資料実測图 1



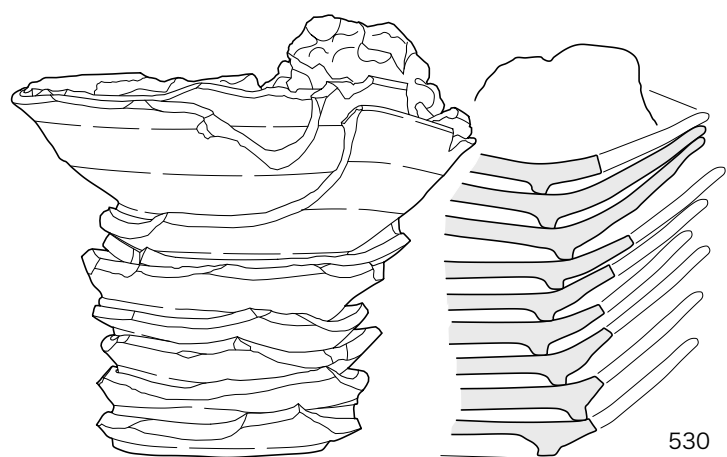


0 20cm

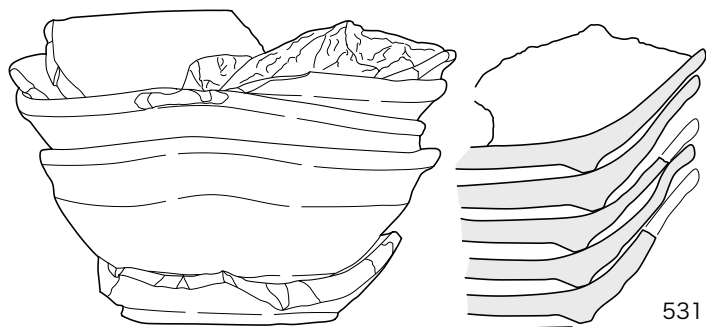




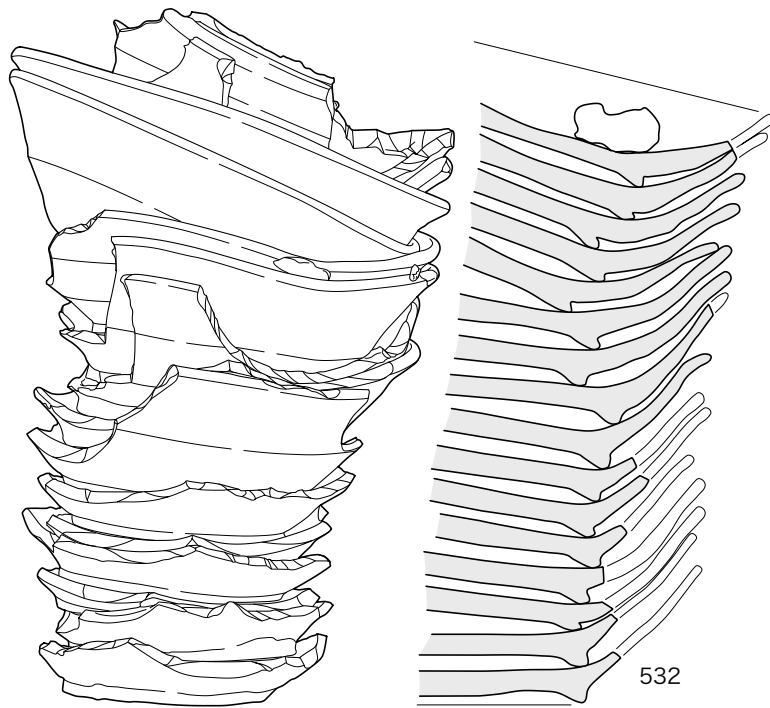
0 20cm



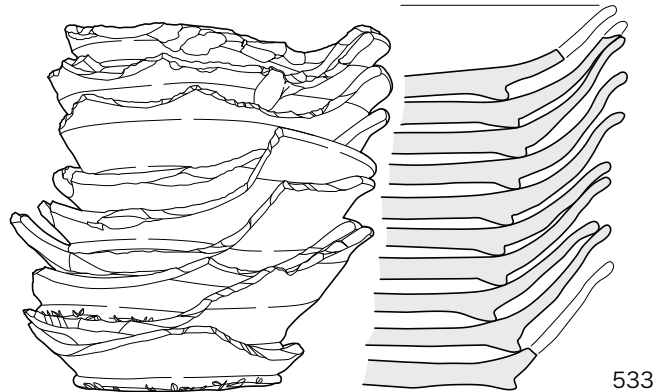
530



531

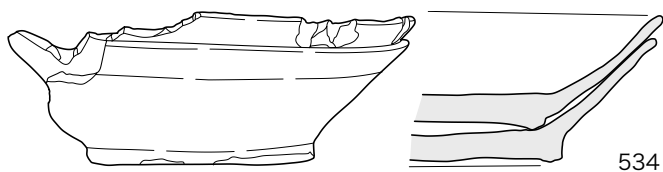


532

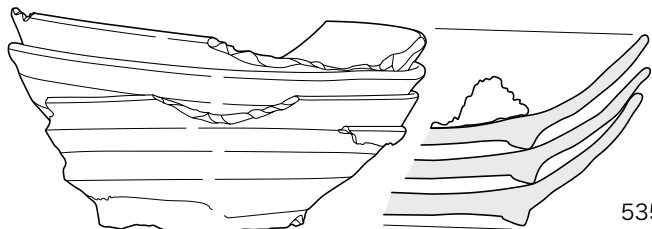


533

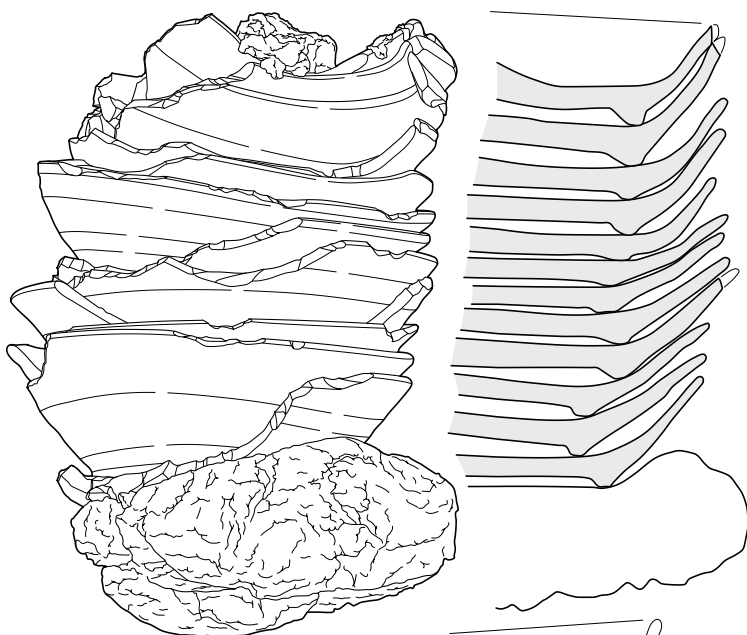
0 20cm



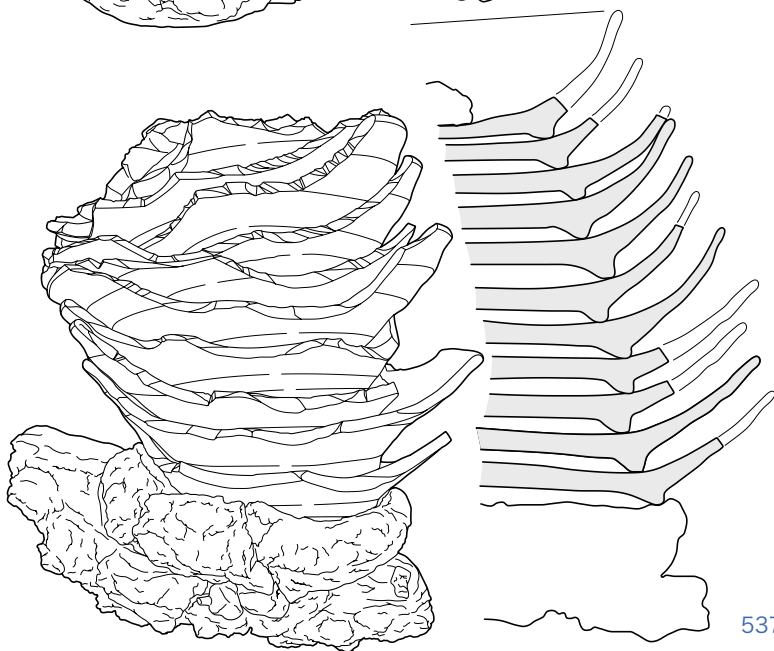
534



535



536



537

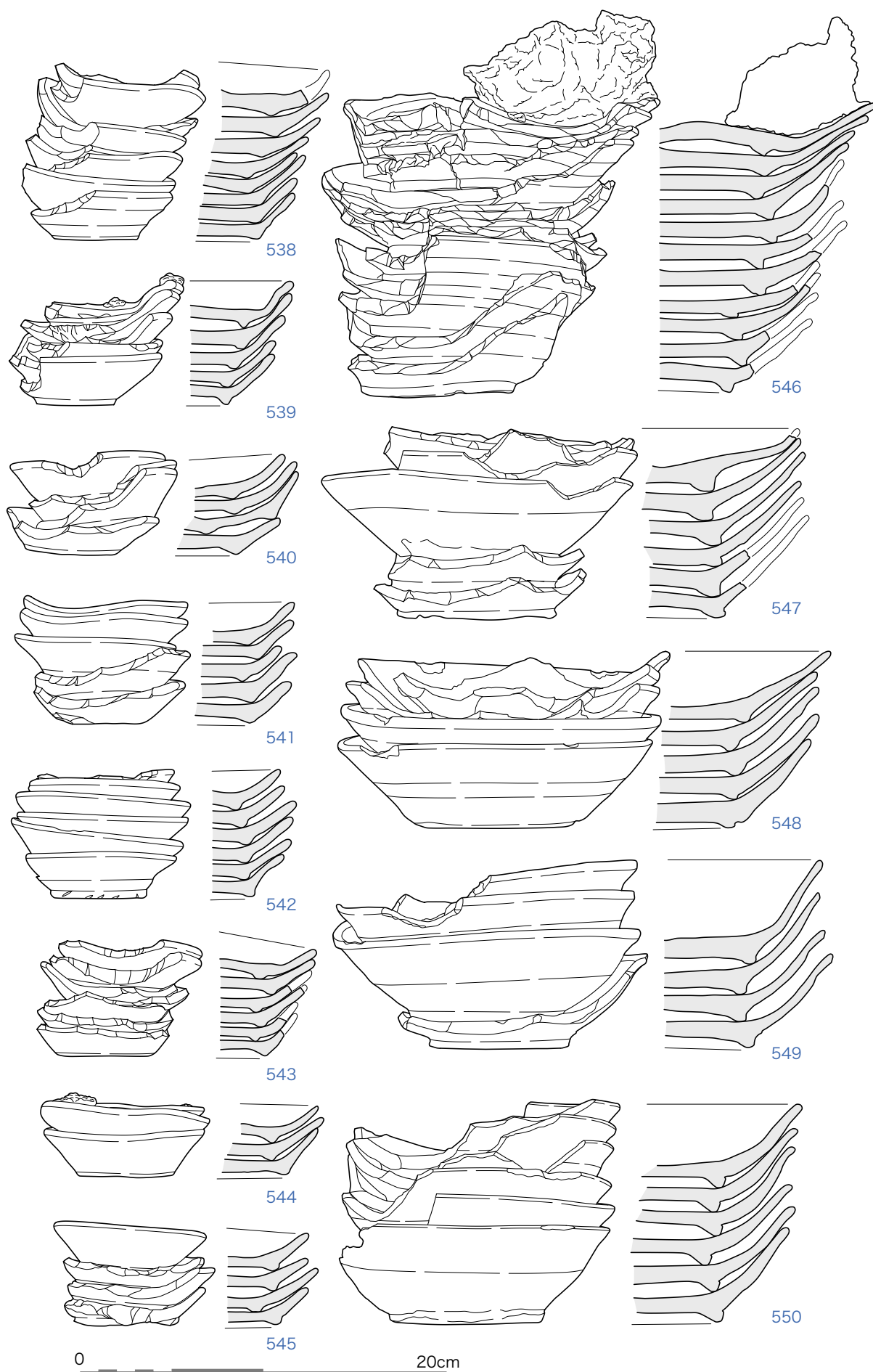
0 20cm



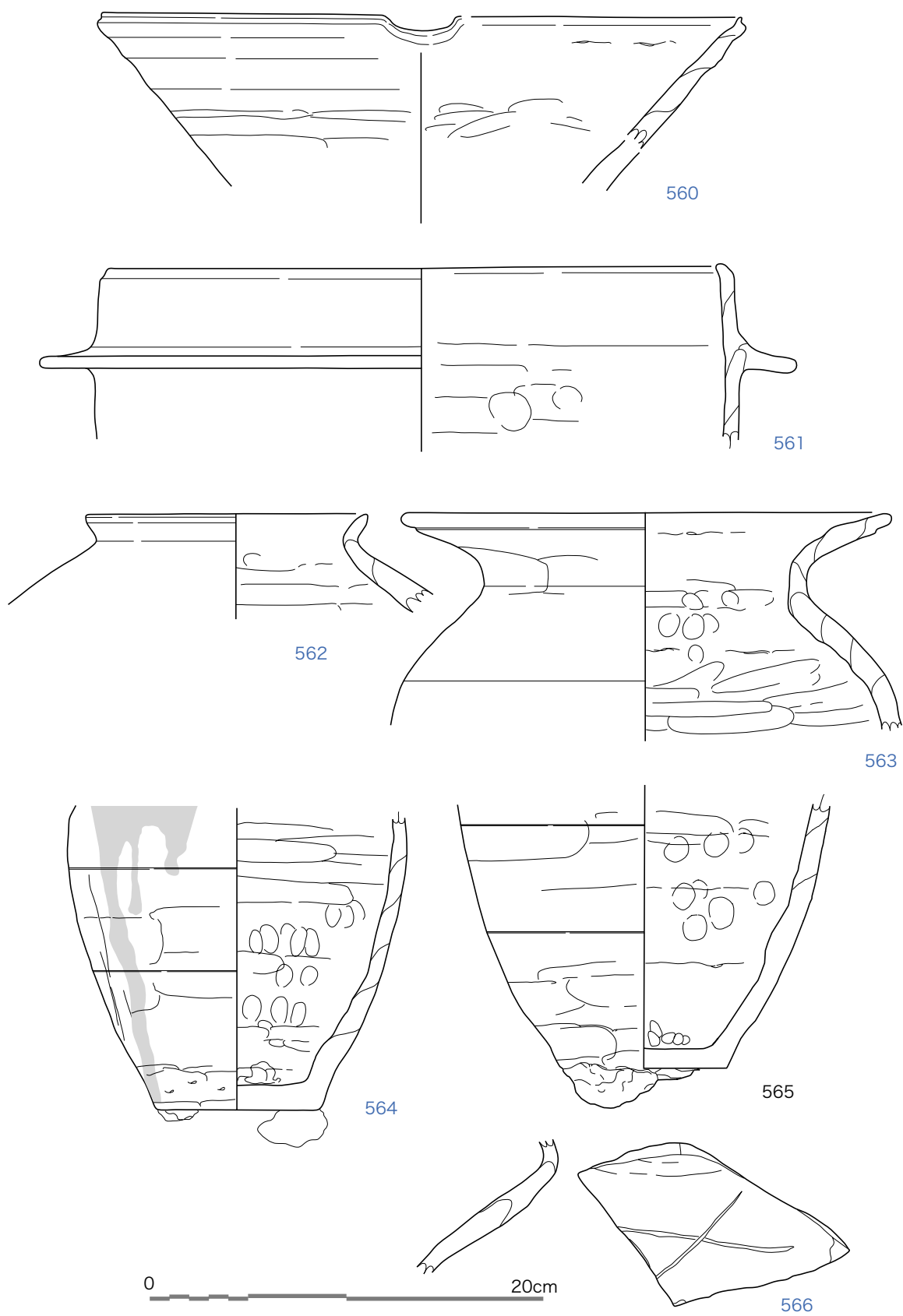
536

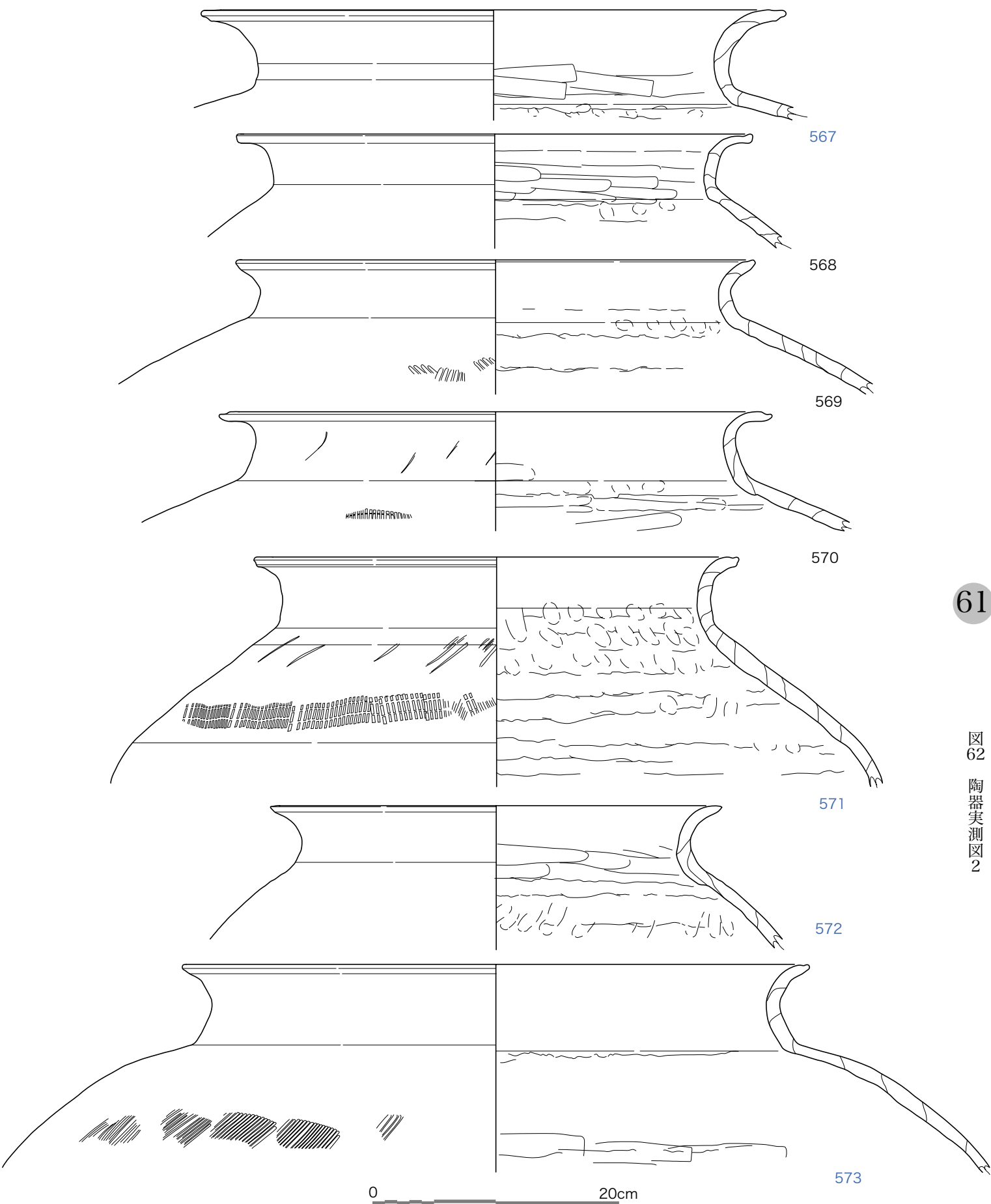


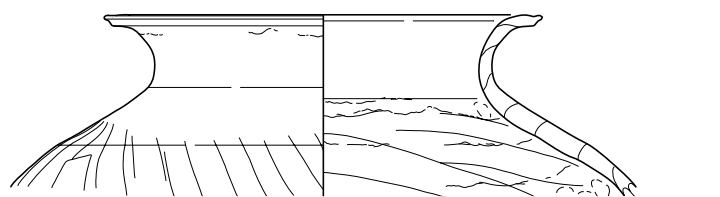
537



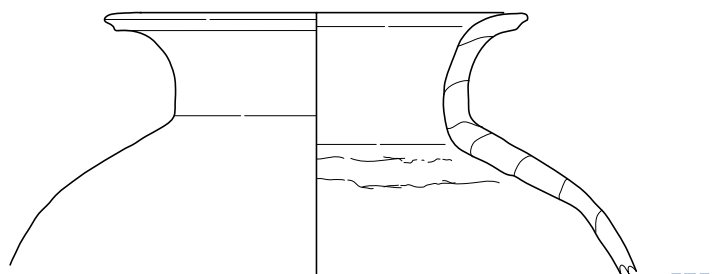




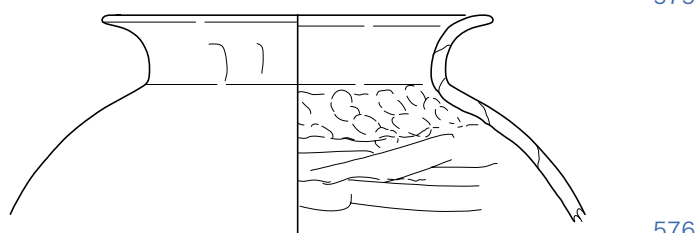




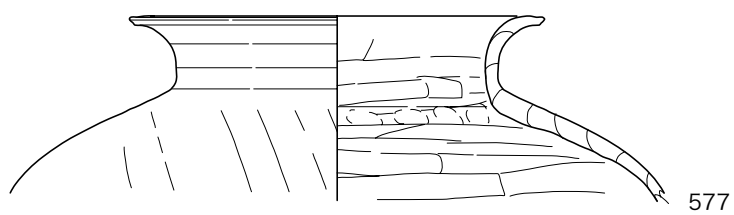
574



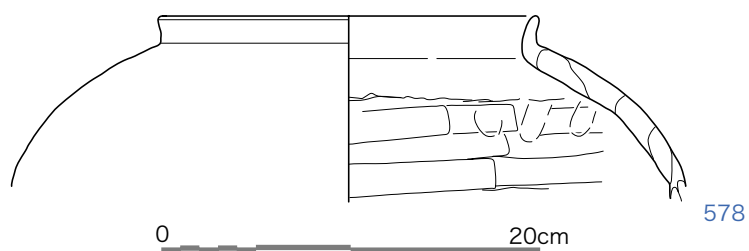
575



576

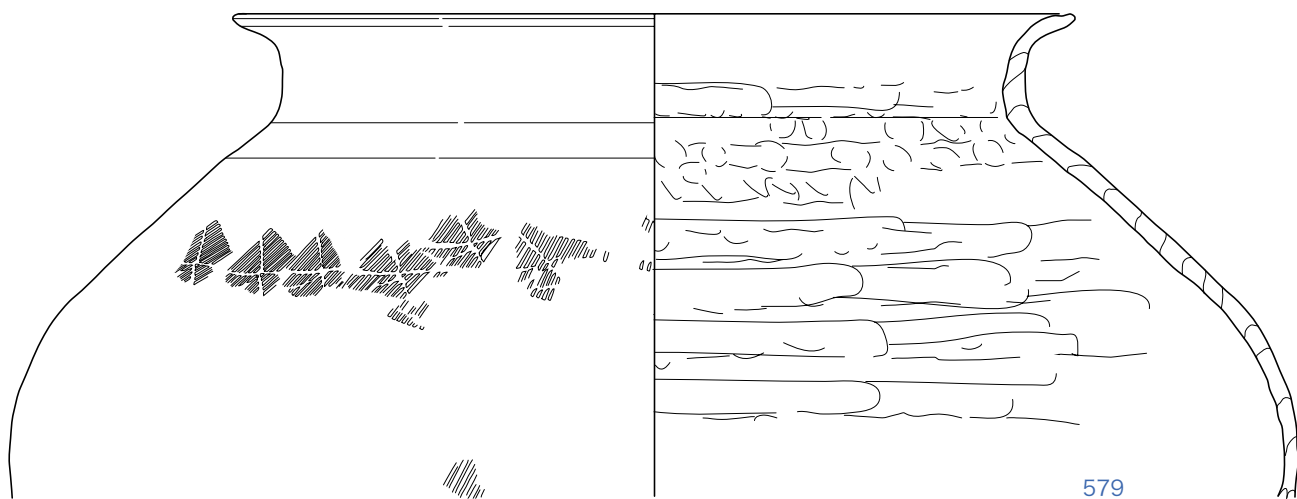


577



578

0 20cm



579

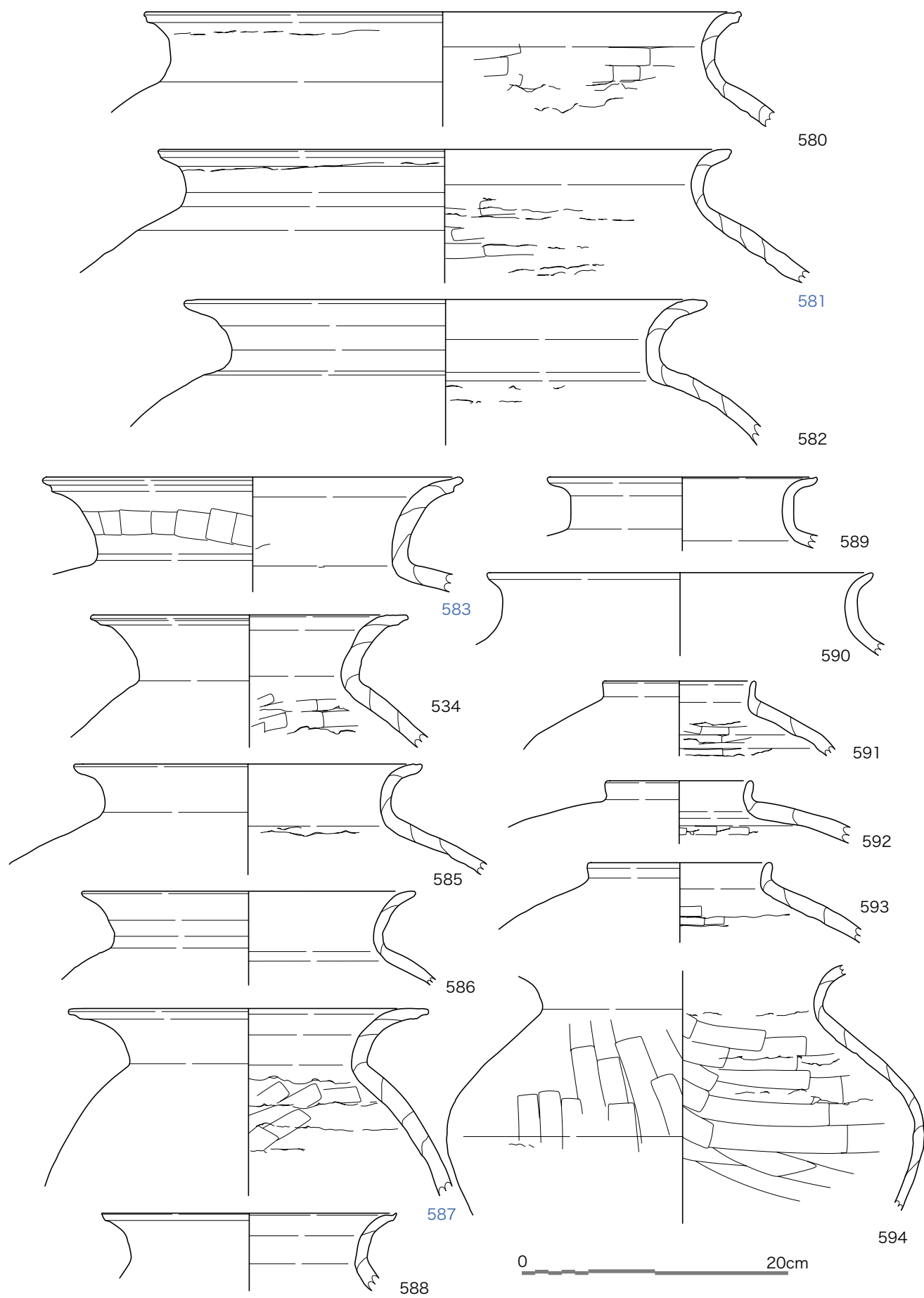


图 64
陶器实测图 4



560



571



561



572



562



573



567



574



564



563



576



581



583



587



578



575



579



566

IV 総括



図 67 奥町 F 古窯群周辺鳥瞰（半田市側から）

■奥町 F 古窯群の操業とその評価

灰層を中心とした報告資料からは、近接して複数の古窯の存在が推定できる。断面図からも甕・壺類を中心としたⅠ層と椀・小椀を中心としたⅡ層の堆積層に区分できるが、さらに複数の灰層が確認されており、数回にわたる生産活動と周辺に複数の窯体の存在が類推できるようなのである。Ⅱ層から出土した椀類は、赤羽・中野編年の 1b 型式新相を中心とした資料で、上層であるⅠ層の甕・壺類は 2 型式を中心とした操業であると思われる。因に周辺の奥町古窯群^{*}や大池古窯群^{**}、さらには池田古窯群などの状況を概観しても、当地区の生産活動の中心の一つが、1b から 2 型式を中心とした操業であることは認められよう。ところで 2 型式の暦年代では 12 世紀中頃を中心とした年代が比定されている。資料の中に含まれていた炭化材 2 点の AMS¹⁴C 年代では、calAD1035,1145,1150 という値が提示できる。したがってここでは資料群の大半の小椀から高台が欠損する時期を、12 世紀中葉の中で考えて行く必要がある点を強調しておきたい。瀬戸窯藤澤編年ではその段階が 4 型式に相当するようであるが、すでに 1150 年を中心とした年代観が提示されており^{***}、ほぼ同様な変化が想定できる。

Ⅱ層の上層であるⅠ層を中心とした甕・壺類では、まず甕類に押印文として帯状連続施文が主体となり、端部は狭い平面を有するものが多い。若干ではあるが、三筋壺が出土しており、単線・複線三筋壺が併存する。また羽釜が認められるなど、総じて 2 型式の様式的特徴が見られる。以上のように奥町 F 古窯群は、当地域に展開する 12 世紀中頃から後半期にかけての集中的な窯業生産の中で取られ直すことができ、それは常滑窯の第 1 段階の盛行期を支える窯業体制の中に位置づけられる。また大池古窯群では椀と甕・壺類を分離して焼成する窯構成が報告されており、本窯群もほぼ同様な生産体制を推測できるようなのである。さらに常滑市の大曾公園古窯群では本窯と類似する椀類や甕・壺類が出土し^{****}、1b 型式から 2 型式への操業体制の問題とも絡んで、常滑窯 2 型式の盛行期に至る重要な資料を提示できえたものと考えたい。

■椀・小椀の変化とその方向性

奥町 F 古窯群出土陶器は、層位出土遺物とそれ以外とに区分できる。層位出土遺物の多くはⅠ層とⅡ層に大きく 2 つにまとめられ、Ⅰ層は主に甕・壺類が包含する層であり、Ⅱ層は椀・小椀類が多量に含まれていた。甕・壺類については全体の形状を確認できる資料が極めて少なく、ここではⅡ層出土椀・小椀類を中心にまとめておきたい。編年的には赤羽・中野編年の 1b 型式新相を中心とした資料であることが理解できる。明瞭な輪花椀・玉縁椀が確認できず、小椀は高台が残り、欠損する資料がほとんど見られない。しかしながら椀類を詳細に観察すると各型式によって若干の新旧が含まれているようである。そこでここではこうした点を踏まえて、型式的な変遷を各型式組列に則して整理してみることにしたい。図 69 のような変遷図が想定でき、2・3 型式へ漸次的に移行するものと考えられる。本資料群の中で中核的な存在である椀 A と椀 B は、前述したように器高の低下と口径の縮小が内包

*長嶋広・柴田直光 1999 『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』愛知県教育委員会
 ** 近藤英正 2001 『大池古窯址群・池田古窯址群』半田市教育委員会
 *** 広岡公夫・藤澤良祐 2003 「東海地方の地磁気永年変化曲線」『考古学と自然科学』第45号
 **** 中野晴久 2001 『大曾公園古窯跡群発掘調査報告書』常滑市文化財調査報告書第25集

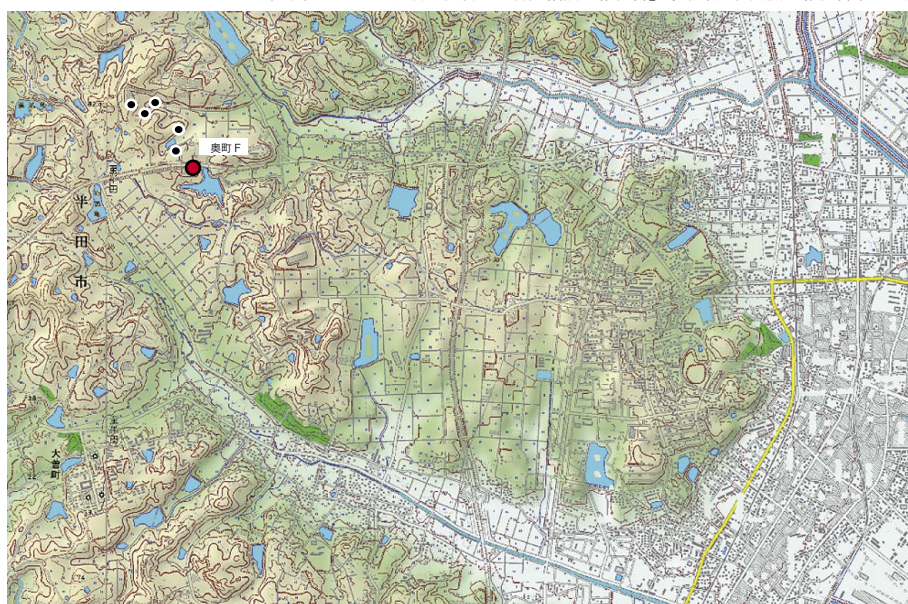


図 68 奥町古窯群

された型式であり、そのまま特徴が後続型式へ継続する。いずれにしろ生産の中心には、A・B という大きな二つのまとまりが存在する。

小椀は、小椀Aから小椀B・Cへの基本的な変遷が想定できる。小椀Cの特徴としては、断面が箱状となる点があり、この変化はすなわち調整痕跡として出発した口縁付近のナデ調整が、そのまま整形技法に転化することにより、単純化した皿形態への志向性が確立したものと考えられよう。ここで問題は、僅か4点であるが高台が欠損した資料が存在する点である。その形態の主体は体部に椀曲がある小椀Aを踏襲する形であり、同時に整形段階の突出した底部を有するものである。小椀Aは前型式から形骸化した系列として受け止めていたが、この変化の中から皿化への一要素が作られた点は大変興味深い。小椀Aの衰退に伴う形態変容が、小椀Cに影響し、皿への志向性が決定づけられたものと類推しておきたい。

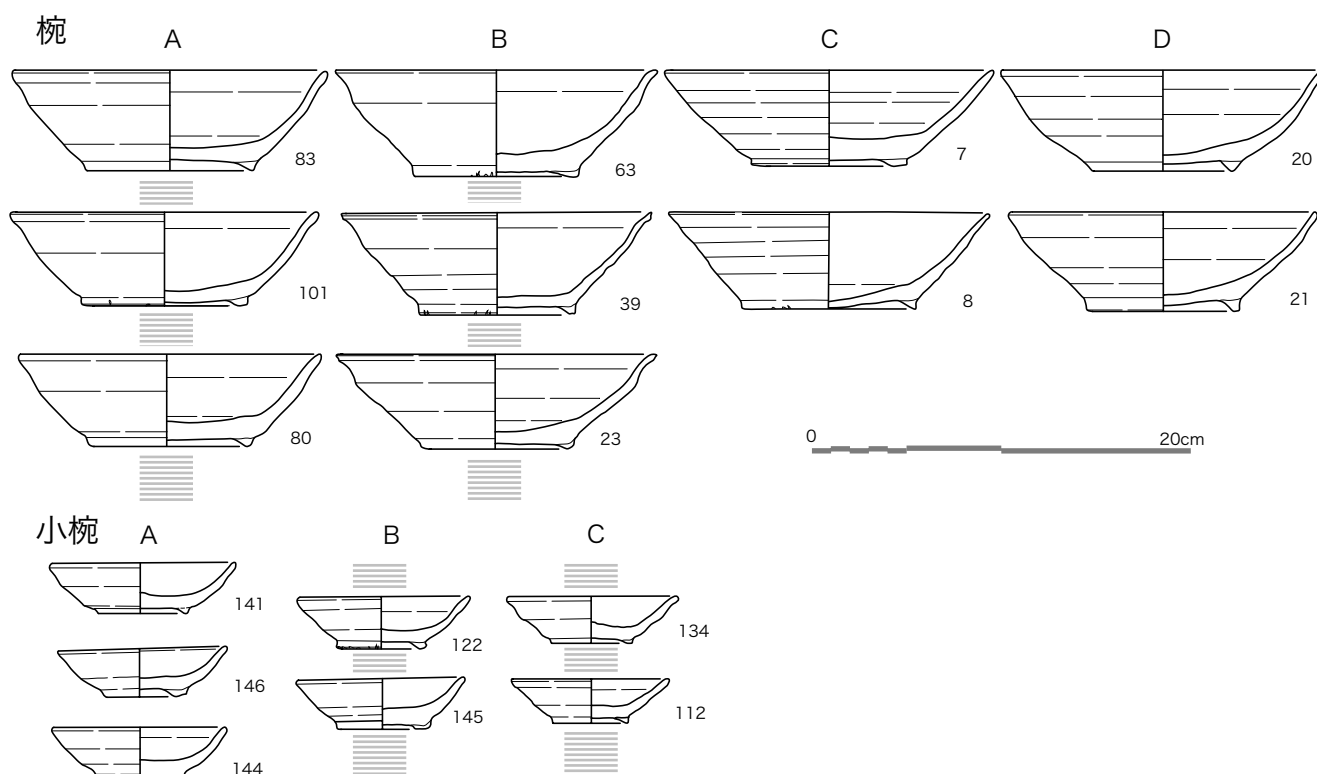


図 69 椀と小椀の変化の方向性

V 抄録

I 経過

知多半島横断道路拡張工事に伴う立会調査として実施。調査期間は平成15年4月。

II 環境

本窯は知多古窯が展開する愛知県知多半島中央部東海岸の半田市内に位置する。所在地は愛知県半田市奥町。

III 調査

断面に残る堆積層とその周辺の調査を実施。遺構は存在せず、灰層の広がりを確認。

出土遺物はI層から甕・壺類が、II層から椀・小椀類が多量に発見された。器種は椀・小椀・甕・広口壺・三筋壺・短頸壺・鉢・羽釜である。(総破片数11475点)

IV 総括

奥町F古窯群は、主に椀類と甕・壺類を別々に焼成した複数の窯体で構成されているものと推測できる。赤羽・中野編年1b型式新相から2型式を中心とする資料(I層が甕・壺類を中心とした2型式、II層が椀類を中心とした1b型式新相)が主体を占め、12世紀中頃の操業と考えた



575



作業風景

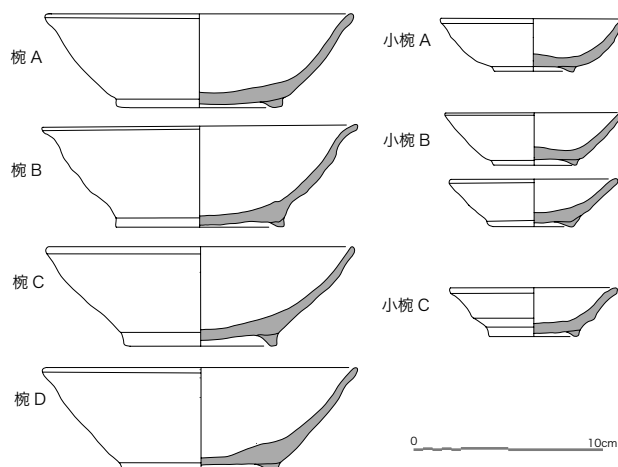


図8 椀分類



516



158

報告書抄録

ふりがな	おくちょうえふこようぐん
書名	奥町F古窯群
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第137集
編著者名	赤塚次郎
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ケ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2005年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯 〇〃	東経 〇〃			
おくちょう えふ こよう ぐん 奥町F古窯群	あいちけん はんだし 愛知県半田市 おくちょう 奥町	23205		34 度 54 分 29 秒	136 度 52 分 47 秒	2003.0403 ～ 2003.0410	計 -- ㎡	知多半島横 断道路拡張 工事に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奥町F古窯群	古窯 跡	室町 時代 末期	堆積層（灰層）	椀・小椀・甕・広口壺 三筋壺・短頸壺・羽釜 鉢	

要約	本窯の調査は、断面観察と灰層を中心とした部分的な調査に留まり、椀類を中心としたII層と甕・壺類を中心としたI層が確認できた。その他に三筋壺・短頸壺・羽釜・鉢などが出土している。主に椀と甕・壺類を別々に焼成した複数の窯体で構成されているものと推測できる。赤羽・中野編年Ib型式新相から2型式を中心とする資料が主体を占め、12世紀中頃の操業と考えられる。
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 137 集

奥町 F 古窯群

2005 年 8 月 31 日

編集発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 有限会社アルケリサーチ